

## いわゆる過疎地域の家族関係 (12)

—— 離村者の追跡調査を通して\* ——

久世敏雄・水山進吾<sup>1)</sup>・松田 惺<sup>2)</sup>  
織田揮準<sup>3)</sup>・永田忠夫<sup>4)</sup>・蔭山英順<sup>5)</sup>  
植村勝彦・鈴木真雄<sup>6)</sup>

### I 問 題

われわれは、過疎の問題を、人口の流出現象が生起している地域に生活している人びとが、その人口流出という変動によって、彼らの生き方にどのような変化が生じているのかを、家族内関係と家族間関係の問題として解明しようとしてきた(続ほか, 1970)。いわゆる過疎の問題は、若年層の流出という形で始まるといわれるが、このことが、家族内の成員関係、すなわち、家族内相互の受容、期待、役割、地位などの関係を変化させると思われる。さらに、ある地域なり、村なりでの若年層が減少することは、そこでの家族相互間の共同、援助、競争、対抗関係を変化させることにもなる。これらの問題を検討するため、われわれは、1950年、1955年、1960年、1965年および1970年における人口について、毎回10%以上の減少が継続していること、地理的条件からして、比較的隣接地域からの影響が少ないと考えられ、孤立的と判断されること、われわれの現実的条件から考えて実働6日間の調査活動が可能であることなどの条件から、1. 長野県下伊那郡上村、2. 山形県最上郡大蔵村沿台地区、3. 愛知県北設楽郡富山村、4. 島根県飯石郡頓原町、5. 熊本県球磨郡水上村の5地域を選定した(続ほか, 1970, 1971)。これらの地区での面接調査の資料をもとにして、われわれは、家族内関係に関して、「子どもに対する役割期待について(その1)」「家族内の将来の見通しについて」「農家の後継者について」を報告し、家族間関係に関して、「地域共同体意識の変

容(1)——公的共同活動の場合——」等を報告した。

例えば、植村の「地域共同体意識の変容(1)——公的共同活動の場合——」は、部落の会合、道路・水路の補修、葬式、消防、娯楽行事、青年団、婦人会、公共物の雪おろし、無尽・村有林の管理、公的共同活動一般について、各地域別にその期日や回数、実施方法・内容、意識・態度、今昔の比較についての検討を行なったところ、各地域間に差異のあることがわかった(植村・続ほか, 1972)。

また、松田は、世帯主が「あととり」に対してもっている役割期待と「あととり」のもっている役割意識の関連を問題とし、この両者を媒介するものとして、世帯主が家業についてもつ意識—職業人としての identity—について、山形県大蔵村と島根県頓原町の比較検討を行なったところ、両地域間に差異のあることを報告している(松田・続ほか, 1972)。

織田も、上述の二地域の被験者を対象として、農家の後継者について検討しているが、ここでも、大蔵村では後継者がおり、頓原町では後継者がいない傾向のあることを見出し、その原因について検討している(織田・続ほか, 1972)。

これらの報告は、いわゆる過疎地の住民から得た面接資料の分析によるのであるが、われわれは、こうした問題を追求する過程において、かつて、いわゆる過疎地に住んでおり、現在、都市およびその周辺に住んでいる人びとが、どのような事情から離村し、郷土をどのように認知し、郷土とのつながりをどの程度維持しているかの状況を把握することも、われわれの問題意識を明らかにし、その理解を一層深めることができると考えた。

ここでの報告の目的は、いわゆる過疎地から離村し、現在、都市およびその周辺で生活している離村者の追跡調査から、離村の事情を検討し、かれらがいわゆる過疎地というふるさとどのようにかかわっているかを明らかにすることである。

この際、まず第1に、離村の状況、都市での生活感情

\* この研究は、昭和46年度科学研究費総合研究(A) (代表者続有恒教授)の「過疎形態と家族関係に関する比較研究」の一部である。なお、この研究のプロジェクトならびにその指導は、故続有恒教授によりなされた。

- 1) 名古屋市立保育短期大学教授
- 2) 名城大学教職課程部助教授
- 3) 三重大学教育学部講師
- 4) 愛知県立看護短期大学講師
- 5) 中京女子大学助教授
- 6) 愛知教育大学講師

や郷土とのつながりが、離村者の出身地域によって異なるか否かを検討する。

つぎに、第2の問題として、離村の状況、都市での生活状況——都市での生活感情および認知——や郷土とのつながりなどに、相互関連がみられるか否かを検討する。すなわち、まず、離村時における離村者の積極性や消極性などが、都市での生活感情および認知、とくにふるさと観といかにかわるか、離村者の郷土志向型が、都市での生活感情および認知といかにかわるかを明らかにし、離村者の村とのつながりを検討する。さいごに、職場や学校、さらに市民としての適応感情は、都市での生活感情および認知、とくに生活適応といかにかわるか、また、都市での在住期間が生活信条の変化といかに関連するかを明らかにすることにより、離村者の都市での適応状況を検討する。

## II 方法

### 1. 面接対象の選定

被面接者の出身地が、いわゆる過疎地であることは当然のこととして、さらに、われわれが面接調査した地域を含むことも、郷土意識を比較理解するためには必要であろう。この条件を考慮しながら、被面接者の転出先の都市として、われわれは、名古屋市および周辺の都市、広島市、熊本市、山形市および札幌市を選定した。

つぎに、面接対象の選定——被面接者およびかれらの出身地——は、面接がスムーズに行なわれるように、各地区の共同研究者に一任した。こうして、最終的に選ばれた面接対象はつぎのとおりである。

- 1) 名古屋市および周辺都市への転出者として、長野県下伊那郡上村出身者および岐阜県揖斐郡坂内村出身者
- 2) 広島市への転出者として、島根県飯石郡頓原町出身者
- 3) 熊本市への転出者として、熊本県阿蘇郡高森町草部地区の出身者
- 4) 山形市および周辺都市への転出者として、山形県最上郡戸沢村、西村山郡西川町、西村山郡朝日町から「都会」へ出て、現在、全日制または定時制の高校に在学している青年
- 5) 札幌市への転出者としては、後志地域の中から京極町、喜茂別町、真狩村、留寿都村のいわゆる「羊蹄東山麓4カ町村」出身の「挙家離村」家庭の者

表1は、被面接者の性別および年代別、表2は、学歴、表3は、職業、表4は、未婚か既婚かを示している。

表1 被面接者の性別および年代別<sup>†</sup>

		上村	坂内村	頓原町	高森町	京極町等	戸沢村等
性別	男	29	37	31	28	32	25
	女	7	1	9	12	8	16
年代別	10代	5	0	5	1	0	37
	20代	11	4	12	6	0	4
	30代	7	17	18	9	3	0
	40代	10	10	4	9	11	0
	50代	3	4	0	8	18	0
	60代	0	2	1	5	7	0
	70代	0	0	0	2	1	0

† 年代の不明は除く

表2 学歴別

	上村	坂内村	頓原町	高森町	京極町等	戸沢村等
大卒	1	2	2	5	0	0
高卒	9	12	18	10	1	2
中卒	11	14	15	12	3	3
尋常小卒	13	9	5	8	27	0
その他	2	1	0	5	9	† 36

† 高校在学中

表3 職業別

	上村	坂内村	頓原町	高森町	京極町等	戸沢村等
農林漁業	4	0	0	0	0	0
自営 商工業主	4	4	5	4	5	0
自営商工 従事者	6	2	7	1	0	0
生産工程 従事者	11	15	4	3	3	0
事務販売 公務員	3	5	13	14	10	2
専門技術	2	3	5	5	0	1
管理	0	2	0	1	2	0
運輸 サービス	1	3	2	1	3	0
単純労働	1	2	0	1	3	0
無職 その他	4	2	4	10	14	38

表4 未・既婚別

	上村	坂内村	頓原町	高森町	京極町等	戸沢村等
既婚	23	38	24	35	40	1
未婚	13	0	16	5	0	40

## 2. 面接方法および時期

個別面接による。質問は、各地区ともに統一されており、40項目におよんでいる。その内容は、

### 1) 被面接者の属性：

性別、既婚・未婚、年齢、学歴、住居形態、職業、親は在村か否か、生家の職業、生家の当主の役職、生家の経済的地位、生家の財産

### 2) 離村の状況：

親戚・兄弟の離村の状況〔1〕<sup>†</sup>、親戚・兄弟の離村の理由〔2〕、当人の離村の時期およびその形態—離村時の年齢、離村の年数—〔3〕、離村の理由〔4〕、離村決定の相談および相談者〔5〕、離村のすすめ〔6〕、離村時の自信・意欲〔7〕、離村前に都会へ出た経験〔8〕、当市選択の理由〔9〕、離村時の家族の反応〔10〕、離村時の親戚・村人・先生・同級生の反応〔11〕

### 3) 都市での生活状況：

①生活感情：生活への感情（満足）—満足度、村との比較—〔12〕、職場・学校への適応感情〔15〕、当市への適応感情〔16〕、村で生活している人への感情〔32〕

②生活認知：当市で一生を暮すか〔25〕、村へ帰って生活する可能性〔26〕、村の将来の認知〔30〕、生活にゆきづまった時の認知〔31〕、生活の認知〔33〕、老後の生活〔36〕、都会で暮すことの幸福〔39〕

### 4) 郷土とのつながり：

居住都市での同郷者の有無〔13〕、居住都市での同郷者との交際〔14〕、帰村頻度〔18〕、生家への手紙・電話の有無〔19〕、生家からの手紙・電話の有無〔20〕、出身地への手紙〔21〕、出身地からの手紙〔22〕、親・兄弟の来訪〔23〕、知人・親戚の来訪〔24〕、友人関係〔28〕、郷土の具体的認知〔29〕、結婚相手の考え方〔35〕、子どもの故郷の認知〔37〕

### 5) その他：

当市での当初と現在の変化〔17〕、両親の老後の面倒〔27〕、跡取についての考え方〔34〕、墓を守るものの考え方〔38〕、現在一番大切なもの〔40〕

に大別することができる（附票参照のこと）。

面接状況は、各地区により若干異なると思われるが、原則として、2人1組で面接を行ない、時間は、1ケース平均1時間30分である。上村、坂内村については、名古屋大学共同研究者により、昭和46年11月から47年12月にかけて、頓原町については、広島大学小川一夫教授により、昭和46年12月から47年2月にかけて、高森町については、熊本大学鈴木康平助教により、昭和46年11月

†〔〕内の数字は面接票の番号を表わす。以下、同様である。

から47年3月にかけて、戸沢村等は、山形県教育研究所三沢清男氏により、昭和47年3月から昭和47年5月にかけて、京極町等は、北海道大学三宅和夫教授により、昭和46年12月から昭和47年3月にかけて行なわれた。

## 3. 記述（整理）の観点

離村者の面接は6地域でなされ、その内容は、すでにのべたように大別すれば、被面接者の属性、離村の状況、都市での生活状況—生活感情および認知—、郷土とのつながりなどである。そこで、まず、6地域のデータを提示することにより、全体的特徴をみる。つきに、離村者の村とのつながりを、離村状況、離村理由および出身地への志向性の観点から検討する。さいごに、離村者の都市での生活適応を、職場・学校や市民としての適応感情や都市での在住期間の観点から検討する。こうして、結果の枠組は、以下のとおりである。

### A 全体的特徴

### B 離村の状況

### C 出身地とのつながり

(1) 離村理由類型を軸として

(2) 出身地への志向性を軸として

### D 都市生活への適応

(1) 都市へのとけこみ感について

(2) 離村者の生活信条

## Ⅲ 結果ならびにその考察

### A. 全体的特徴

ここでは、全体的特徴を、離村の状況、都市での生活状況および郷土とのつながりにわけて検討しよう。

#### A-1 離村の状況

表5は、各地区別に、離村時の年齢と離村の形態を、表6は、離村の理由を、表7は、当市選択の理由を示したものである。

京極町等出身の札幌地区の被面接者は、離村の形態がほとんど家族同伴であり、離村の年代もほぼ30代以降（表5）という、いわば挙家離村者である。離村の理由も、「村で働いていたが事情の変化で成り立たなくなったため（K）」（表6）が圧倒的に多く、さらに、「農業に対する不安」「子どもを頼って」など「その他」の項目が多い。また、札幌市を選択した理由をみると、「親戚があるから」（表7）および「子どもがいるから」などの「その他」が多く、他地区の離村者と比べ、明らかに差異がある。

また、戸沢村等出身の山形地区の被面接者は単身の10代が圧倒的に多く（表5）、全日制または定時制の高校に在学している青年である。かれらの離村の理由をみる

と、「将来村で活躍するため(A, D)」が他地区に比べても圧倒的に多く、ついで、「都市で就職するため(B, Cなど)」(表6)の順である。また、山形市および周辺の都市を選択した理由をみると、「進学先があるから」(表7)が非常に多く、この離村者たちも、他地区の離村者に比べ、明らかに特徴がある。

上村, 坂内村, 頓原町および高森町出身の被面接者についてみると、離村時の年齢は10代がもっとも多く、20代, 30代と年代の進むにつれて減少する傾向があり、離村の形態は、単身の多いことがわかる(表5)。離村の理由をみると、「都市で就職するため(B, C, E, F)」および「村で生活できなくて(H, I, J, K)」といった理由をあげる者が多い(表6)。なお、頓原町および高森町の「その他」は、「子どもの教育」「子どもの進学のため」が多くみられる。離村者が生活の場と

して、なぜそれぞれの都市を求めたかの理由をみると、坂内村, 高森町出身者は、「就職先の所在地だから」という者が多く、頓原町出身者は、「村に近いから」という者が多く、この4地区の出身者では、その理由が異なっている。

このようにみえてくると、離村時の状況は、各地区それぞれの特殊性を示しながら、しかも、上村, 坂内村, 頓原町, 高森町の4地区は、かなり共通性がある。これに対して、京極町等出身の札幌地区の者は、挙家離村であることのため、また、戸沢村等出身の山形地区の者は、高校在学者であることのため、これら2地区の出身者は、他の4地区の出身者に比べ、異質的であるように思われる。したがって、以降の分析にさいしてはあらかじめ注意しておく必要がある。

表5 離村時の年齢と離村の形態<sup>†</sup>

	上 村		坂 内 村		頓 原 町		高 森 町		京極町等		戸沢村等		χ <sup>2</sup> 値
	単	集	単	集	単	集	単	集	単	集	単	集	
10代	23	1	14	1	22	1	12	1			39	1	単身・家族と 上村・坂内村 頓原町・高森 町の4地区 10.85* 年代と4地区 19.26
20代	1	3	11	1	10		6	2		1	1		
30代	1	4	1	4	3	2	2	3		5			
40代		3		1		1		5		9			
50代				1		1		4	2	18			
60代以上										5			

† 単は単身, 集は集団, 家は家族同伴の略, 形態不明は除く。

\* 印は  $p < .05$ , \*\*印は  $p < .01$ である。以下すべて同様。

表6 離村の理由(二重チェック可)

		上 村	坂内村	頓原町	高森町	京極町等	戸沢村等	χ <sup>2</sup> 値
進学し村へ帰って活躍するため	(A)	0	0	1	0	0	20	A+D, B+C+E+F, H+I+J+K, およびG+Lと4地区 19.01*
就職し腕を磨いて村で活躍するため	(D)	4	0	3	1	0	1	
進学し都会で就職するため	(B)	5	5	3	6	0	9	19.01*
一応就職し働きながら学ぶため	(C)	7	4	5	1	0	7	
都会ですっと働くため	(E)	13	18	13	15	3	3	
結婚までの間働きながらその準備をするため	(F)	1	0	1	0	0	2	
次・三男でとにかく村にはいられないので	(H)	9	5	4	2	0	0	
村にはいたかったが村で働く場所がないので	(I)	13	8	4	4	1	0	
災害に遭って村では暮しが立たなくなったため	(J)	3	5	2	1	1	0	
村で働いていたが事情の変化で成り立たなくなったため	(K)	4	4	6	7	21	0	
結婚したため	(G)	1	0	0	2	0	0	
その他	(L)	6	6	18	11	20	3	

表7 当市選択の理由(二重チェック可)

	上 村	坂内村	頓原町	高森町	京極町等	戸沢村等	$\chi^2$ 値
進学先があるから	3	1	0	8	0	38	理由と4地区 53.40**
就職先の所在地だから	11	22	11	17	6	9	
親戚があるから	14	6	8	4	13	3	
知人がいるから	8	4	8	3	2	3	
村に近いから	2	1	19	8	2	6	
その他	9	9	12	12	28	0	

表8 生活感情<sup>†</sup>

		上 村	坂内村	頓原町	高森町	京極町等	戸沢村等	$\chi^2$ 値
調身子のよさ	全く不満	2 (5.6)	1 (2.6)	0	1 (2.5)	0	1 (2.4)	全く不満+かなり不満, どちらもでない, かなり満足+全く満足と戸沢村等を除く5地区 12.15
	かなり不満	6 (16.7)	1 (2.6)	6 (15.0)	1 (2.5)	5 (12.5)	0	
	どちらでもない	10 (27.8)	11 (28.9)	6 (15.0)	8 (20.0)	13 (32.5)	24 (58.5)	
	かなり満足	8 (22.2)	10 (26.3)	15 (37.5)	10 (25.0)	16 (40.0)	8 (19.5)	
	全く満足	10 (27.8)	15 (39.5)	13 (32.5)	19 (47.5)	6 (15.0)	8 (19.5)	
毎日の気分のよさ	全く不満	4 (11.1)	0	0	0	0	3 (7.3)	5.89
	かなり不満	1 (2.8)	2 (5.3)	6 (15.0)	1 (2.5)	5 (12.5)	4 (9.8)	
	どちらでもない	13 (36.1)	13 (34.2)	12 (30.0)	15 (37.5)	13 (32.5)	22 (53.7)	
	かなり満足	11 (30.6)	13 (34.2)	15 (37.5)	9 (22.5)	17 (42.5)	10 (24.4)	
	全く満足	7 (19.4)	10 (26.3)	7 (17.5)	15 (37.5)	5 (12.5)	2 (4.9)	
日常生活の便宜	全く不満	0	0	0	0	1 (2.5)	1 (2.4)	12.47
	かなり不満	2 (5.6)	4 (10.5)	2 (5.0)	1 (2.5)	7 (17.5)	3 (7.3)	
	どちらでもない	9 (25.0)	8 (21.1)	6 (15.0)	7 (17.5)	4 (10.0)	10 (24.4)	
	かなり満足	13 (36.1)	10 (26.3)	15 (37.5)	12 (30.0)	14 (35.0)	17 (41.5)	
	全く満足	11 (30.6)	16 (42.1)	17 (42.5)	20 (50.0)	14 (35.0)	10 (24.4)	
収入	全く不満	1 (2.8)	0	3 (7.5)	3 (7.5)	3 (7.5)	0	27.15**
	かなり不満	3 (8.3)	1 (2.6)	10 (25.0)	4 (10.0)	13 (32.5)	2 (4.9)	
	どちらでもない	14 (38.9)	15 (39.5)	12 (30.0)	9 (22.5)	14 (35.0)	8 (19.5)	
	かなり満足	11 (30.6)	19 (50.0)	13 (32.5)	14 (35.0)	9 (22.5)	1 (2.4)	
	全く満足	7 (19.4)	3 (7.9)	2 (5.0)	8 (20.0)	0	2 (4.9)	
無答	0	0	0	2 (5.0)	1 (2.5)	28 (68.3)		
職場(学校)	全く不満	0	0	1 (2.5)	0	0	0	6.59
	かなり不満	4 (11.1)	2 (5.3)	5 (12.5)	5 (12.5)	5 (12.5)	4 (9.8)	
	どちらでもない	7 (19.4)	11 (28.9)	8 (20.0)	10 (25.0)	13 (32.5)	18 (43.9)	
	かなり満足	13 (36.1)	14 (36.8)	19 (47.5)	11 (27.5)	11 (27.5)	18 (43.9)	
	全く満足	12 (33.3)	10 (26.3)	3 (7.5)	11 (27.5)	5 (12.5)	1 (2.4)	
(勉)仕事の内容(学)	全く不満	3 (8.3)	0	0	0	1 (2.5)	0	8.63
	かなり不満	4 (11.1)	4 (10.5)	10 (25.0)	5 (12.5)	2 (5.0)	5 (12.2)	
	どちらでもない	6 (16.7)	9 (23.7)	11 (27.5)	10 (25.0)	13 (32.5)	20 (48.8)	
	かなり満足	15 (41.7)	15 (39.5)	13 (32.5)	8 (20.0)	14 (35.0)	14 (34.1)	
	全く満足	7 (19.4)	10 (26.3)	6 (15.0)	13 (32.5)	5 (12.5)	2 (4.9)	

† 数値は頻数, 括弧内は%をあらわす。以下すべて同様。  
無答は「収入」を除いて省略する。以下表9, 表10も同様。

## A-2 都市での生活状況

### A-2-1 都市での生活感情

まず, 生活感情についてみよう。表8は, 現在の生活に満足しているか, 表9は, 職場や学校にとけこめた感

じか, 表10は, この市の住民になりきれたかの質問に対する結果を, 地域別, 項目別に示したものである。

「身体の調子のよさ」「毎日の気分のよさ」「日常生活の便宜」「職場(学校)」「仕事の内容」の各項目で

は、現在の生活に満足する者（「全く満足」および「かなり満足」）が半数をこえており、上村、坂内村、頓原町および高森町出身者についてよくあてはまる。京極町等の出身者は、上述の4地区の出身者と同様の傾向がみられるが、「収入」に関して、不満とする者の多いが目につく。一方、戸沢村等の出身者は、生活に対する満足の「どちらでもない」とする者の多い傾向がある。また、「収入」に関して、無答の多いのも目立っている（表8）。

職場や学校に「完全にとけこめた」という者は、頓原町および高森町の出身者に多く、「大体とけこめたと思うが、時々しっくりしない感じもする」者は、戸沢村等および上村などの出身者に多い。なお、京極町等出身者には、「うまくいっている面もあるが、しっくりしない感じが強い」という者もかなりいる（表9）。

また、この市の住民になりきれた感じか、の質問に対

しては、全般的にみて、特定項目への反応が少なく、戸沢村等出身者の「考えたことがない」が目立つ程度である。そして、高森町、坂内村、頓原町出身者は、何とか市民になりきれた感じのするという者——「この市の住民として立派な都会人になれたと思う」、「大体、都会人になれたと思うが、時にはまだまだと思わされる」——が45%前後いるのに対して、京極町等出身者では、「全然、まだ田舎者だ」「都会人になろうとは思わない」という者が40%いることになる（表10）。

このようにみえてくると、各地区の離村者とも、離村先の市民になりきれたかどうかは別として、現在の生活に満足している者が多く、職場生活においても、とけこめた感情をもっている者が多いといえる。ただ、この生活感情に関して、戸沢村等出身者は、各地区出身者の応答とは異質な反応が多く、さらに、京極町等出身者も、若干、その傾向があるように思われる。

表9 職場・学校への適応

		上 村	坂内村	頓原町	高森町	京極町等	戸沢村等	$\chi^2$ 値
完全にとけこんだ	(A)	14 (38.9)	16 (42.1)	27 (67.5)	22 (55.0)	9 (22.5)	10 (24.4)	A, B, C, D, E + F + Gと戸沢村等を除く5地区 48.08**
大体とけこんだと思う	(B)	16 (44.4)	12 (31.6)	4 (10.0)	15 (37.5)	14 (35.0)	22 (53.7)	
半分程度	(C)	1 (2.8)	1 (2.6)	0	0	3 (7.5)	3 (7.3)	
うまくいっている面もあるがしっくりしない	(D)	0	1 (2.6)	2 (5.0)	0	8 (20.0)	5 (12.2)	
全然とけこめない	(E)	1 (2.8)	1 (2.6)	0	0	1 (2.5)	0	
そういうことは考えたことも感じたこともない	(F)	3 (8.3)	1 (2.6)	0	2 (5.0)	2 (5.0)	1 (2.4)	
そういうことは問題にしてい	(G)	0	5 (13.2)	2 (5.0)	1 (2.5)	2 (5.0)	0	
その他		0	1 (2.6)	1 (2.5)	0	0	0	

表10 当市への適応

		上 村	坂内村	頓原町	高森町	京極町等	戸沢村等	$\chi^2$ 値
この市の住民として立派な都会人になれたと思う	(A)	4 (11.1)	6 (15.8)	6 (15.0)	11 (27.5)	3 (7.5)	3 (7.3)	A+B, C, D+E, F, G+H+その他, と5地区 30.69*
大体都会人になれたと思う	(B)	4 (11.1)	11 (28.9)	11 (27.5)	7 (17.5)	4 (10.0)	6 (14.6)	
半分程度だろう	(C)	6 (16.7)	7 (18.4)	5 (12.5)	6 (15.0)	4 (10.0)	3 (7.3)	
わからない	(D)	4 (11.1)	2 (5.3)	4 (10.0)	2 (5.0)	3 (7.5)	7 (17.1)	
考えたことがない	(E)	5 (13.9)	5 (13.2)	5 (12.5)	7 (17.5)	4 (10.0)	18 (43.9)	
都会人になろうとは思わない	(F)	4 (11.1)	3 (7.9)	7 (17.5)	3 (7.5)	7 (17.5)	2 (4.9)	
大部分はまだまだだ	(G)	4 (11.1)	3 (7.9)	0	2 (5.0)	5 (12.5)	1 (2.4)	
全然田舎者だ	(H)	1 (2.8)	0	2 (5.0)	2 (5.0)	9 (22.5)	1 (2.4)	
その他		4 (11.1)	0	0	0 (0.0)	1 (2.5)	0	

表11 生活の認知<sup>†</sup>

		上 村	坂内村	頓原町	高森町	京極町等	戸沢村等	$\chi^2$ 値
人情について	出身地	30 (83.3)	29 (76.3)	34 (85.0)	33 (82.5)	37 (92.5)	37 (90.2)	7.77
	都会	1 (2.8)	3 (7.9)	3 (7.5)	3 (7.5)	0	0	
	わからない	3 (8.3)	4 (10.5)	3 (7.5)	4 (10.0)	3 (7.5)	4 (9.8)	
近隣のつきあい	出身地	29 (80.6)	28 (73.7)	26 (65.0)	28 (70.0)	32 (80.0)	34 (82.9)	14.84
	都会	1 (2.8)	6 (15.8)	8 (20.0)	5 (12.5)	6 (15.0)	1 (2.4)	
	わからない	5 (13.9)	2 (5.3)	6 (15.0)	7 (17.5)	2 (5.0)	6 (14.6)	
仕事の厳しさ	出身地	9 (25.0)	6 (15.8)	2 (5.0)	6 (15.0)	11 (27.5)	9 (22.0)	17.03
	都会	17 (47.2)	22 (57.9)	25 (62.5)	22 (55.0)	22 (55.0)	15 (36.6)	
	わからない	7 (19.4)	8 (21.1)	12 (30.0)	10 (25.0)	6 (15.0)	17 (41.5)	
収 入	出身地	2 (5.6)	2 (5.3)	1 (2.5)	4 (10.0)	18 (45.0)	1 (2.4)	69.06**
	都会	31 (86.1)	28 (73.7)	34 (85.0)	29 (72.5)	11 (27.5)	27 (65.9)	
	わからない	2 (5.6)	5 (13.2)	5 (12.5)	6 (15.0)	9 (22.5)	13 (31.7)	
物の購買	出身地	0	1 (2.6)	1 (2.5)	3 (7.5)	6 (15.0)	1 (2.4)	22.78*
	都会	36(100.0)	31 (81.6)	36 (90.0)	34 (85.0)	27 (67.5)	38 (92.7)	
	わからない	0	5 (13.2)	3 (7.5)	3 (7.5)	7 (17.5)	2 (4.9)	
暮しの安易さ	出身地	12 (33.3)	15 (39.5)	15 (37.5)	14 (35.0)	15 (37.5)	20 (48.8)	9.77
	都会	18 (50.0)	16 (42.1)	18 (45.0)	24 (60.0)	23 (57.5)	19 (46.3)	
	わからない	5 (13.9)	5 (13.2)	7 (17.5)	2 (5.0)	2 (5.0)	2 (4.9)	
医 療	出身地	1 (2.8)	1 (2.6)	0	0	1 (2.5)	2 (4.9)	9.06
	都会	33 (91.7)	33 (86.8)	37 (92.5)	40(100.0)	35 (87.5)	37 (90.2)	
	わからない	1 (2.8)	1 (2.6)	3 (7.5)	0	4 (10.0)	2 (4.9)	
教 育	出身地	1 (2.8)	2 (5.3)	1 (2.5)	1 (2.5)	2 (5.0)	7 (17.1)	18.45*
	都会	30 (83.3)	34 (89.5)	35 (87.5)	37 (92.5)	32 (80.0)	32 (78.0)	
	わからない	5 (13.9)	0	4 (10.0)	2 (5.0)	5 (12.5)	2 (4.9)	
交 通	出身地	1 (2.8)	2 (5.3)	0	0	6 (15.0)	0	33.21**
	都会	32 (88.9)	33 (86.8)	40(100.0)	36 (90.0)	28 (70.0)	41(100.0)	
	わからない	2 (5.6)	1 (2.6)	0	4 (10.0)	6 (15.0)	0	
娯 楽	出身地	1 (2.8)	1 (2.6)	2 (5.0)	0	4 (10.0)	0	29.62**
	都会	29 (80.6)	34 (89.5)	36 (90.0)	36 (90.0)	25 (62.5)	40 (97.6)	
	わからない	6 (16.7)	1 (2.6)	2 (5.0)	4 (10.0)	11 (27.5)	1 (2.4)	
住 居	出身地	21 (58.3)	21 (55.3)	26 (65.0)	16 (40.0)	15 (37.5)	17 (41.5)	16.63
	都会	9 (25.0)	10 (26.3)	6 (15.0)	17 (42.5)	19 (47.5)	13 (31.7)	
	わからない	6 (16.7)	5 (13.2)	8 (20.0)	7 (17.5)	6 (15.0)	11 (26.8)	
結 婚	出身地	9 (25.0)	8 (21.1)	6 (15.0)	1 (2.5)	13 (32.5)	4 (9.8)	44.60**
	都会	20 (55.6)	23 (60.5)	18 (45.0)	27 (67.5)	6 (15.0)	14 (34.1)	
	わからない	7 (19.4)	5 (13.2)	16 (40.0)	12 (30.0)	18 (45.0)	23 (56.1)	
葬 儀	出身地	12 (33.3)	10 (26.3)	11 (27.5)	9 (22.5)	15 (37.5)	7 (17.1)	46.34**
	都会	14 (38.9)	19 (50.0)	13 (32.5)	20 (50.0)	6 (15.0)	3 (7.3)	
	わからない	9 (25.0)	7 (18.4)	16 (40.0)	10 (25.0)	19 (47.5)	31 (75.6)	
習 慣	出身地	13 (36.1)	9 (23.7)	8 (20.0)	7 (17.5)	15 (37.5)	10 (24.4)	39.76**
	都会	8 (22.2)	15 (39.5)	22 (55.0)	24 (60.0)	6 (15.0)	6 (14.6)	
	わからない	14 (38.9)	12 (31.6)	10 (25.0)	8 (20.0)	16 (40.0)	25 (61.0)	
生 活 環 境	出身地	22 (61.1)	21 (55.3)	13 (32.5)	12 (30.0)	13 (32.5)	30 (73.2)	33.88**
	都会	12 (33.3)	12 (31.6)	20 (50.0)	22 (55.0)	17 (42.5)	10 (24.4)	
	わからない	1 (2.8)	3 (7.9)	7 (17.5)	6 (15.0)	10 (25.0)	1 (2.4)	

† 無答は省略

表12 都会で暮すことの幸せについて

		上 村	坂内村	頓原町	高森町	京極町等	戸沢村等	$\chi^2$ 値
問題なく幸せだ	(A)	3 ( 8.3)	2 ( 5.3)	4 (10.0)	4 (10.0)	2 ( 5.0)	0	A+B, C, D+Eと6地区  27.51**
田舎で暮すことに比べれば 都会で暮す方がまだ幸せだ	(B)	10 (27.8)	8 (21.1)	12 (30.0)	16 (40.0)	9 (22.5)	3 ( 7.3)	
同じくらい、わからない、 考えたことがない	(C)	14 (38.9)	20 (52.6)	15 (37.5)	18 (45.0)	21 (52.5)	24 (58.5)	
田舎で暮すことの方がまだ 幸せだ	(D)	9 (25.0)	7 (18.4)	7 (17.5)	1 ( 2.5)	7 (17.5)	14 (34.1)	
全然幸せではない	(E)	0	1 ( 2.6)	1 ( 2.5)	0	0	0	
そ の 他	(F)	1 ( 2.8)	0	1 ( 2.5)	1 ( 2.5)	1 ( 2.5)	0	

A-2-2 都市での生活認知

ここでは、都市での生活認知についてみる。表11は、都会を出身地と比較して、「人情」、「近隣のつきあい」、「仕事の厳しさ」「収入」「物の購買」「暮しの安易さ」「医療」「教育」「交通」「娯楽」「住居」「結婚」「葬儀」「習慣」「生活環境」の各項目をどう思うか、どちらがよいかについて、表12は、人間にとって都会で暮すことの幸せについて、各地区別、項目別に結果を示したものである。これらの結果によれば、「物の購買」「医療」「教育」「交通」「娯楽」の各項目は、都会の方が出身地に比べよいという者が圧倒的に多い。この傾向は、各地区の出身者ともにみられるが、とくに、京極町等出身者を除いた各地区の出身者に顕著にみられている。また、「収入」も、京極町等出身者を除いて、同様に都会の方が出身地に比べよいという者が多い。これに対して、「人情」「近隣のつきあい」の各項目は、各地区の出身者とも、出身地が都会に比べてよいという者が圧倒的に多い。

一方、「生活環境」は、都会をよいとする者の多い地区——高森町、頓原町、京極町等出身者——と出身地をよいとする者の多い地区——上村、坂内村、戸沢村等出身者——に分かれている。また、「結婚」「葬儀」「習慣」の各項目は、都会をよいとする者の多い地区——坂内村、高森町出身者——と「わからない」という応答の多い地区——京極町等、戸沢村等出身者——に分かれている(表11)。

これらの結果は、都市での生活や出身地の生活の長所・短所の認知を表わしているものといえる。そこで、人間にとって都会で暮すことの幸せをどう思っているかをみると、「都会で暮すことも、田舎で暮すことも同じくらいでどちらともいえない」という反応が、各地区出身者ともに多い。とくに、坂内村、京極町等、戸沢村等出身者では、過半数を占めている。ただ、頓原町、高森町出身者は、若干、都会での生活に好意的であり、戸沢村等

出身者は、田舎での生活に好意的である傾向がみられる(表12)。

つぎに、表13は、当市で一生を終るつもりかについて、表14は、何かの生家の事情で、また村へ帰って生活することがあるかについて、表15は、万一、今の生活がゆきづまったときどうするかについて、表16は、老後をどう考えるかについての質問結果を、地域別、項目別に示したものである。戸沢村等出身者は、当市で一生を暮すことについては、「他の土地へ移るつもりだ」「考えたことがない」の反応が多く(表13)、村へ帰って生活する可能性もあり(表14)、現在の生活にゆきづまったときは、「その時になってみなければわからない」が多数を占め(表15)、老後の生活も「どうなるか考えたこともない」者が多く(表16)、他地区の出身者とは、異なった反応を示している。これに対して、他の5地区の出身者は、村へ帰って生活する可能性は少なく(表14)生活にゆきづまったときは、「何とか都会で頑張る」ことを考えており(表15)、かなり共通した反応もみられている。一方、京極町等の出身者は、他地区の出身者に比べ、当市で一生を暮すつもりの方が多く(表13)、老後の生活も、「子どもに面倒をみてもらう」者が多く(表16)、上村、坂内村、頓原町、高森町の出身者に比べ、異なった反応もみられている。また、坂内村出身者は、当市で一生を暮そうとする者、「年をとったら村へ帰りたい」者が相半ばしており(表13)、老後の生活も「出身地へ帰ってのんびり暮したい」者のかなりいること(表16)も特徴的である。

こうして、都会がよいか田舎がよいかといった生活認知では、各地区とも、かなり共通した認知のみられることも確かである。しかし、当市で一生を暮すか、生活にゆきづまったときどうするか、老後の生活をどうするか、といった将来の展望を含めた生活認知では、戸沢村等出身の山形地区の者は、他地区の出身者に比べ、将来の展望が漠としており、明確とはいえない。一方、他の



表13 当市で一生活を暮すか

	上 村	坂内村	頓原町	高森町	京極町等	戸沢村等	$\chi^2$ 値
その考えである (A)	17 (47.2)	12 (31.6)	18 (45.0)	23 (57.5)	28 (70.0)	2 (4.9)	A+B, C+D, E+G, F+H+その他と戸沢村等を除く5地区 42.23**
希望はしていないがそうなると思う (B)	3 (8.3)	4 (10.5)	2 (5.0)	1 (2.5)	6 (15.0)	1 (2.4)	
生家に呼び戻されるだろう (C)	0	1 (2.6)	0	0	0	8 (19.5)	
年をとったら村へ帰りた (D)	5 (13.9)	12 (31.6)	0	5 (12.5)	1 (2.5)	1 (2.4)	
職をかるかもしれないのでわからない (E)	1 (2.8)	4 (10.5)	2 (5.0)	2 (5.0)	1 (2.5)	5 (12.2)	
他の土地へ移るつもり (F)	3 (8.3)	1 (2.6)	5 (12.5)	1 (2.5)	1 (2.5)	13 (31.7)	
転任があるのでわからない (G)	0	2 (5.3)	0	3 (7.5)	2 (5.0)	0	
考えたことがない (H)	3 (8.3)	1 (2.6)	2 (5.0)	4 (10.0)	1 (2.5)	11 (26.8)	
その他	3 (8.3)	1 (2.6)	3 (7.5)	1 (2.5)	0	0	
無 答	1 (2.8)	0	8 (20.0)	0	0	0	

表14 村へ帰って生活する可能性<sup>†</sup>

	上 村	坂内村	頓原町	高森町	京極町等	戸沢村等	$\chi^2$ 値
イ イ エ	27 (75.0)	27 (71.1)	35 (87.5)	30 (75.0)	34 (85.0)	16 (39.0)	5地区 6.42
ハ イ	7 (19.4)	7 (18.4)	4 (10.0)	9 (22.5)	2 (5.0)	22 (53.7)	

<sup>†</sup> 無答は省略，以下表15，表16も同様である。

表15 生活にゆきづまったとき

	上 村	坂内村	頓原町	高森町	京極町等	戸沢村等	$\chi^2$ 値
出身地に引揚げる	2 (5.6)	6 (15.8)	9 (22.5)	8 (20.0)	1 (2.5)	1 (2.4)	5地区 21.84**
都会で頑張る	23 (63.9)	26 (68.4)	28 (70.0)	18 (45.0)	27 (67.5)	4 (9.8)	
その時になってみなければわからない	11 (30.6)	6 (15.8)	2 (5.0)	13 (32.5)	12 (30.0)	35 (85.4)	

表16 老後の生活

	上 村	坂内村	頓原町	高森町	京極町等	戸沢村等	$\chi^2$ 値
出身地でのんびり暮したい (A)	11 (30.6)	16 (42.1)	4 (10.0)	6 (15.0)	4 (10.0)	7 (17.1)	A, B, C, D, E+Fと5地区 46.90**
都会で楽しく暮したい (B)	3 (8.3)	9 (23.7)	9 (22.5)	10 (25.0)	5 (12.5)	2 (4.9)	
どうなるか考えたこともない (C)	10 (27.8)	6 (15.8)	13 (32.5)	9 (22.5)	5 (12.5)	20 (48.8)	
子どもに面倒をみてもらう (D)	9 (25.0)	4 (10.5)	3 (7.5)	6 (15.0)	17 (42.5)	6 (14.6)	
養老院・老人ホームへ行く (E)	0	0	1 (2.5)	2 (5.0)	2 (5.0)	2 (4.9)	
その他 (F)	3 (8.3)	3 (7.9)	10 (25.0)	7 (17.5)	6 (15.0)	4 (9.8)	

5地区の出身者は、それぞれの地区の特殊性を反映させながら、それでも共通した認知を示す面のあることも確かである。しかし、その中では、京極町等出身の札幌地区の者は、他地区の出身者に比べ、子どもとのつながりといった点で特徴がある。

### A-3 郷土とのつながり

郷土とのつながりを、まず、「あなたは、時々出身地へ帰りますか」「生家から親兄弟が訪ねてくることがありますか」「出身地から知人や親戚が訪ねてくることがありますか」といった質問項目について検討してみよう。

離村者が出身地へ帰村するかについてみると、各地区の離村者とも、ほとんど帰村していることがわかる（表

表17 帰村の有無<sup>†</sup>

	上 村	坂内村	頓原町	高森町	京極町等	戸沢村等	$\chi^2$ 値
イ イ エ	2 (5.6)	1 (2.6)	0	2 (5.0)	3 (7.5)	0	5.72
ハ イ	34 (94.4)	35 (92.1)	40(100.0)	37 (92.5)	37 (92.5)	41(100.0)	

† 無答は省略、表19も同様である。

表18 親兄弟の来訪の有無

	上 村	坂内村	頓原町	高森町	京極町等	戸沢村等	$\chi^2$ 値
イ イ エ	6 (16.7)	4 (10.5)	8 (20.0)	4 (10.0)	4 (10.0)	14 (34.1)	無答を除く 7.83
ハ イ	29 (80.6)	26 (68.4)	31 (77.5)	29 (72.5)	13 (32.5)	26 (63.4)	
無 答	1 (2.8)	8 (21.1)	1 (2.5)	7 (17.5)	23 (57.5)	1 (2.4)	

表19 知人・親戚の来訪の有無

	上 村	坂内村	頓原町	高森町	京極町等	戸沢村等	$\chi^2$ 値
イ イ エ	13 (36.1)	16 (42.1)	22 (55.0)	4 (10.0)	5 (12.5)	28 (68.3)	43.43**
ハ イ	23 (63.9)	21 (55.3)	18 (45.0)	36 (90.0)	31 (77.5)	13 (31.7)	

17)。さらに、出身地から親兄弟が訪ねてくるかについてみると、京極町等の離村者を除いて、親兄弟がかなり訪ねてくることがわかる(表18)。京極町等の離村者は、無応答が多いが、これは、挙家離村とかかわるものといえよう。また、知人や親戚が訪ねてくるかについてみると、高森町、京極町等、上村出身者には、知人や親戚がかなり訪ねてくることがわかる。戸沢村等、頓原町出身者には、これらの人々の来訪はあまり多くない(表19)。

郷土とのつながりを、帰村の頻度、親兄弟の来訪の有無などの行動レベルで考えると、離村者は、各地区ともに、郷土とのつながりをかなりもっているといえることができる。

つぎに、郷土とのつながりを「現在居住している市に同郷の人(伯叔父母、同胞、従兄弟、同窓生、友人)がいるか」「その人たちと親しく交際しているか」「出身地での友人とこの市の友人とどちらが親しいか」「あなたのお子さんの故郷はどこだと思われませんか」といった質問項目で検討してみよう。

現在生活している都市に同郷の人がいるかについては、坂内村出身者の76.3%を最低として、同胞か従兄弟か友人など同郷の人がいることになる(表20)。これらの人々と親しく交際している同郷の人をみると、上村、頓原町出身者は同胞、従兄弟と、坂内村出身者は同胞と、高森町出身者は従兄弟、同窓生、知人と、京極町等

出身者は知人と、戸沢村等出身者は同窓生と、親しく交際している者のかなりいることがわかる(表21)。出身地の友人の方が都市の友人よりも親しいとする者は、京極町等、戸沢村等出身者に多く、都市の友人が出身地の友人よりも親しいとする者は、他の4地区の出身者に多い傾向がある(表22)。子どもの故郷はどこかの認知をみると、子どもの故郷は「当然自分の出身地だ」とする者は、京極町等、高森町出身者に多く、京極町出身者についてよくあてはまる。また、戸沢村等出身者は、「考えたこともない」者が極めて多い。これに対して、上村、坂内村出身者は、「子どもの故郷は出身地だ」という者に比べ、「子どもの生れ育った所だ」という者が多い(表23)。

このようにみえてくると、離村者の生活している都市に同郷者は数多くいるのであるが、親しく交際している者については、必ずしも多いといえない。さらに、出身地および都市の友人の親しさの程度や子どもの故郷の認知は、特に出身地とか都市とか一方が親しいというものではない。これらの認知レベルでの故郷とのつながりは、都市での生活期間や他のさまざまな要因により、しだいに変容するものでもあろう。

この郷土とのつながりにおいても、戸沢村等および京極町等出身者は、他の4地区の出身者に比べ、表21、表23にみられるように若干の差異がある。(久世敏雄)

表20 当市での同郷の人の有無

	上 村	坂内村	頓原町	高森町	京極町等	戸沢村等	$\chi^2$ 値
いる	33 (91.7)	29 (76.3)	40(100.0)	38 (95.0)	40(100.0)	35 (85.4)	22.12 <sup>**</sup>
いない, しらない	2 ( 5.6)	8 (21.1)	0	1 ( 2.5)	0	6 (14.6)	

表21 交際の状況

	上 村	坂内村	頓原町	高森町	京極町等	戸沢村等	$\chi^2$ 値
伯 叔 父 母	7 (19.4)	2 ( 5.3)	5 (12.5)	10 (25.0)	4 (10.0)	2 ( 4.9)	64.37 <sup>**</sup>
同 胞	21 (58.3)	16 (42.1)	16 (40.0)	9 (22.5)	10 (25.0)	2 ( 4.9)	
従 兄 弟	18 (50.0)	6 (15.8)	12 (30.0)	13 (32.5)	7 (17.5)	0	
同 窓 生	7 (19.4)	5 (13.2)	10 (25.0)	12 (30.0)	10 (25.0)	17 (41.5)	
知 人	10 (27.8)	5 (13.2)	8 (20.0)	13 (32.5)	22 (55.0)	8 (12.5)	

表22 出身地と当市での友人の親しさ

	上 村	坂内村	頓原町	高森町	京極町等	戸沢村等	$\chi^2$ 値
この市での友人はいない	1 ( 2.8)	3 ( 7.9)	0	1 ( 2.5)	7 (17.5)	1 ( 2.4)	53.83 <sup>**</sup>
出身地の友人との方が親しい	8 (22.2)	11 (28.9)	17 (42.5)	12 (30.0)	20 (50.0)	19 (46.3)	
両方同じくらい	9 (25.0)	5 (13.2)	3 ( 7.5)	8 (20.0)	4 (10.0)	5 (12.2)	
比較できない	3 ( 8.3)	2 ( 5.3)	0	4 (10.0)	4 (10.0)	3 ( 7.3)	
この市の友人との方が親しい	14 (38.9)	13 (34.2)	20 (50.0)	15 (37.5)	3 ( 7.5)	13 (31.7)	
出身地の友人とは会っていない	0	3 ( 7.9)	0	0	2 ( 5.0)	0	

表23 子どもの故郷の認知

	上 村	坂内村	頓原町	高森町	京極町等	戸沢村等	$\chi^2$ 値
当然自分の出身地だ	10 (27.8)	14 (36.8)	9 (22.5)	19 (47.5)	28 (70.0)	0	無答を除く 159.66 <sup>**</sup>
子どもが生まれ育った所だ	16 (44.4)	17 (44.7)	11 (27.5)	13 (32.5)	5 (12.5)	4 ( 9.8)	
自分の子どもには故郷はないと思う	4 (11.1)	2 ( 5.3)	1 ( 2.5)	1 ( 2.5)	1 ( 2.5)	0	
考えたこともない	4 (11.1)	4 (10.5)	0	0	1 ( 2.5)	32 (78.0)	
その他	0	0	3 ( 7.5)	5 (12.5)	4 (10.0)	3 ( 7.3)	
無 答	1 ( 2.8)	1 ( 2.6)	16 (40.0)	2 ( 5.0)	1 ( 2.5)	2 ( 4.9)	

**B. 離村の状況**

ここでは、A-1で述べた離村の状況を、さらに詳細に検討してみよう。そのさい、まず第1に離村時の状況、とくに離村時期を中心に検討する。ついで離村の理由を軸にして、離村後に対する態度との関連および離村状況との関連についての分析を行なう。

**B-1 離村時期を中心に**

疎過現象は、戦後になって、特に1960年以降の、高度経済成長政策に伴って生起してきたのであるが、以前から、次三男は都会へ出て各種の職業に就いてきたので

あり、その例は枚挙にいとまがない。

今回の被面接者が、離村して、都会に定着した時期をみると表24のようになり、京極町等、戸沢村等以外は、戦争直後より人口流出が始まり、現在まで、同じような割合で進行している。京極町等および戸沢村等においては、昭和40年代に流出が始まっていることになる。しかし、このように結論づけることは、被面接者の抽出の段階で全く問題がなければよいのであるが、現実のさまざまな問題を考えると、少しばかり問題があるように思われる。すなわち、例えば戸沢村等における被面接者

表24 被面接者の離村時期

	上 村	坂内村	頓原町	高森町	京極町等	戸沢村等	計
昭和17年以前	1	3	0	7	0	0	11
18年～22年	0	2	0	1	0	0	3
23年～27年	2	7	2	6	0	0	17
28年～32年	10	6	6	4	1	0	27
33年～37年	6	14	6	5	0	0	31
38年～42年	9	5	17	8	2	2	43
43年以降	8	1	9	9	37	39	103
計	36	38	40	40	40	41	235

は、37名が19才までの青年層であることや、あるいはまた、面接に応じてくれる人は比較的都会で成功している人たちであろうことなどの点を考慮すると、簡単に地域の差を比較することは困難である。この点については、地域間の比較をする場合には常に考慮しておかねばならない。

つぎに、離村の時期と都会での生活に対する満足度との関係についてみよう。

収入について、戸沢村等を除く5地域全体でみると、191名のうち半数以上が「どちらでもない」か「やや満足」という応答をしており、「全く不満」と応答した人が10名と1割にも満たないことが示されている。この1割にも満たない人びとの分析を試みることも興味深いことであるが、本報告では省略する。

地域別にみると、京極町等において、「やや不満」と答えた者が多いが、かれらは、離村して4年にならぬ人

表25 離村時期と収入に対する満足度（5地域）<sup>†</sup>

	全く不満	やや不満	どちらでもない	やや満足	全く満足	計
昭和17年以前	0	0	3	4	3	10
18年～22年	0	0	1	1	1	3
23年～27年	1	2	6	4	4	17
28年～32年	1	3	7	14	2	27
33年～37年	1	3	11	14	2	31
38年～42年	4	11	12	12	1	40
43年以降	3	12	24	17	7	63
計	10	31	64	66	20	191

<sup>†</sup> 戸沢村等を除く。

表26 離村時期と収入に対する満足度（京極町等）<sup>†</sup>

	全く不満	やや不満	どちらでもない	やや満足	全く満足	計
昭和28年～32年	1	0	0	0	0	1
33年～37年	0	0	0	0	0	0
38年～42年	0	1	1	0	0	2
43年以降	2	12	13	9	0	36
計	3	13	14	9	0	39

<sup>†</sup> 無応答1名

表27 離村時期と収入に対する満足度（頓原町）

	全く不満	やや不満	どちらでもない	やや満足	全く満足	計
昭和23年～27年	0	1	0	1	0	2
28年～32年	0	2	1	3	0	6
33年～37年	1	1	1	3	0	6
38年～42年	2	6	4	4	1	17
43年以降	0	0	6	2	1	9
計	3	10	12	13	2	40

たちであり、離村時が最近であればあるほど、都会での生活は不満の材料が充満していると感じられるのではないであろうか（表26）。

今ひとつ特徴的なことは、頓原町において、38年から42までに離村した17名のうち6名が、収入に対して「やや不満」と答えており、頓原町全体で15%にも達する（表27）。これの細部までの検討が、今後の問題として、浮かび上がってこよう。（鈴木真雄）

### B-2 離村理由と離村後に対する態度との関連から

表28は6地域の離村時の理由を示したものである。その理由のうち、(A)進学し、村へ帰って活躍するため、(B)進学し、都会で就職するため、(C)一応就職し、働きながら学ぶため、(D)就職し、腕を磨いて、村で活躍するため、(E)都会でずっと働くため、(F)結婚までの間、働きながらその準備をするため、の6つの理由を「主体的離村」としてまとめ、(H)次・三男で、とにかく村にはいられないので、(I)村には居たかったが、村で働く場所がないので、(J)災害にあって、村では暮しが立たなくなったため、(K)村で働いていたが、事情の変化で、成り立たなくなったため、の4つの理由からの離村を「強制的離村」としてまとめた。(G)結婚したため、という理由を代表とする中性的理由を「その他の離村」とした。

主体的離村が中心的地域が戸沢村等、反対に強制的

表28 地域別離村理由

地域 離村理由	上 村	坂内村	頓原町	高森町	京極町等	戸沢村等
主体的離村	30 (45.5)	27 (49.1)	26 (43.3)	23 (46.0)	3 (6.5)	42 (93.3)
強制的離村	29 (43.9)	22 (40.0)	16 (26.7)	14 (28.0)	23 (50.0)	0
その他の離村	7 (10.6)	6 (10.9)	18 (30.0)	13 (26.0)	20 (43.5)	3 (6.7)

表29 地域別離村時の自信

地域 自信	上 村	坂内村	頓原町	高森町	京極町等	戸沢村等
自信があった	20 (55.6)	20 (52.7)	24 (60.0)	22 (55.0)	17 (44.5)	17 (36.6)
不安だった	9 (25.0)	8 (21.1)	13 (32.5)	10 (25.0)	16 (40.0)	19 (46.3)
何も感じなかった	7 (19.4)	10 (26.3)	3 (7.5)	6 (15.0)	6 (15.0)	7 (17.1)

表30 地域別離村時におけるその後の生活への動機づけ

地域 動機づけ	上 村	坂内村	頓原町	高森町	京極町等	戸沢村等
頑張っってやっいてこう	32 (88.8)	32 (84.2)	31 (77.5)	32 (80.0)	30 (75.0)	32 (78.0)
気がすすまない	2 (5.6)	2 (5.3)	4 (10.0)	0	3 (7.5)	1 (2.4)
特別何とも思わなかった	2 (5.6)	4 (10.5)	5 (12.5)	7 (17.5)	6 (15.0)	8 (19.5)

表31 離村理由と離村時の自信

離村理由 自信	主体的 離 村	強制的 離 村	その他の 離 村
自信があった	79 (52.3)	63 (60.6)	46 (56.0)
不安だった	46 (30.5)	31 (29.8)	21 (25.0)
何も感じなかった	26 (17.2)	10 (9.6)	17 (19.0)

表32 離村理由と離村時の動機づけ

離村理由 動機づけ	主体的 離 村	強制的 離 村	その他の 離 村
頑張っってやっいてこう	123 (82.0)	92 (88.5)	52 (79.0)
気がすすまない	8 (5.3)	6 (5.5)	3 (3.1)
特別何とも思わなかった	19 (12.7)	6 (5.5)	12 (17.9)

離村が中心的地域は京極町等である。主体的離村と強制的離村がほぼ同率で戸沢村等と京極町等の中間を示しているのが上村と坂内村である。頓原町と高森町は主体的離村とその他の離村が多く、離村の理由として混合型を示している。

表29は離村時における、その後の自信を示したものである。上村、坂内村、頓原町、高森町の4地域はほぼ同

傾向を示し、離村時には不安が無く、自信を持って離村している者が過半数である。一方、京極町等と戸沢村等は他の4地域に比較して不安を持って離村している者が目立ち、自信を持って離村している者とほぼ同数を示している。

表30は離村時におけるその後の生活・仕事に対する動機づけの程度を示したものである。全地域ともに離村後の生活には高い動機づけを持っており、主体的離村中心の地域も、強制的離村中心の地域も、またその中間型の地域においても差がなく、離村する際には高い動機づけを持っていることがわかる。

この関係をさらに明確にするために離村の理由と自信の関係を示したものが表31であり、離村の理由と動機づけの関係を示したものが表32である。主体的離村者においても、強制的離村者においても、離村時の、自信、動機づけには両者の間に差は見られない。

こうして見てくると、離村の理由は、本調査においては戸沢村等が主体的離村者が多く、京極町等は逆に強制的離村者が多く、上村と坂内村がその中間として類似した比率を占めている。また頓原町と高森町は上村・坂内村と同傾向ではあるが、その他の離村が多い。そして離村時の不安に関しては、京極町等・戸沢村等のように、主体的であり、強制的であり、離村の限定度の高い者が

多い地域では不安を持つ者の多さがある。しかし、他の中間に位置する地域ではその不安の多さには差がない。また離村時のその後の生活への動機づけには全地域に差がなく、離村理由が主体的な者は当然ながら、強制的離村者の多い地域においても、その動機づけは高い。また一般的に主体的離村と強制的離村において不安や動機づけの差は見られない。(蔭山英順)

### B-3 離村理由と離村状況との関連について

ここでは離村理由を軸にし、離村者の年齢、離村時期、離村方法等離村状況との関連を分析し、離村の形態をより詳細に検討することを目的とする。

なお、戸沢村等については、方法のところで触れてるように、他地域のサンプルと異なり本来の離村者と言いがたいので、分析から除いてある。また、サンプルのうち女性については、少数であること、男性の離村と離村の意味づけが異なることが予想されることなどから除いてある。

#### B-3-1 離村理由の分類

離村理由を分類するにあたり、離村が村から都会への流出という形で生じているので、村を視点にした分類と、都会を視点にした分類に分けた。まず都会に視点をあて、都会が村の人びとを引きつける理由、すなわち「何をしに」「何のために」都会へ出ていこうとするのかという都会へ出る目的について分類した。面接票〔4〕の「離村の理由」のうち、進学を第一目的としている者(B, B・E, Lのうち進学するためと回答した者。Aはこの中にあてはまるがAと回答した者なし)を「進学するため」とし、「働きながら学ぶため」(C, C・E)、就職することを第一目的とした者(D, D・E, E)を「就職するため」、「結婚するため」(G)、「子供の教育のため」(Lでそのように回答した者)、「子供と同居するため」(Lでそのように回答した者)、の6分類と、目的的ではないが都会に強い誘引がある「都会へのあこがれ」(Lでそのように回答した者)を含めた。

次に視点を村にあて、人びとがこれまで生活を営んでいた村であるのに、村での生活を継続できなくなった理由、いわば都会へ追い出させるような村での生活継続拒否要因について分類した。面接票〔4〕の「離村の理由」のうちH~Kを分類した。ただLにおける回答のうち「村で働く場所がない」と回答した者もあり(Iの「村には居たかったが」という条件に抵抗を感じていると思われる)、Iと回答した者を含めて「村では働く場所がない」とした。また「農業に対する不安」と回答した者が5名いたので項目を作り、さらに上述の項目とやや異なる面もあるが「転勤のため」もこの分類項目に入れ

た。

離村理由の結果は表33のようである。都会へ出る目的では、「就職するため」(32.9%)が最も多く、「進学するため」としている者もその大多数が都会で就職することを考えている。都会へ出る最大の目的は、村での生活継続拒否要因のうちでも「村では働く場所がない」(20.9%)が多く、都会の働く場所を求めていくことである。言い換えれば、村においては生活の基盤となる経済的側面を満すことができないから人びとは離村し、それを満足させてくれるであろう都会へ向かうことになる。このことは、時代の流れ、すなわち村の生活にも現金収入が必要となり、村の人口を支えるだけの経済的基盤の成長が伴わず、個人的レベルで考えてみても「災害にあって生活ができなくなった」(6.3%)、村で働いていた事業の縮小など「事情の変化があって生活できなくなった」(25.9%)と回答され、村での生活を支えていた収入源がなくなったり、先祖伝来の田畑だけでは生活することができなくなって「農業に対する不安」(8.2%)が生起してくる。そこに流れるものは、経済的意味で村の人びとがその村である水準の生活を保持するためには、ある限られた人口しか生活していけない、その限られた人口そのものの数量が年々、生活水準の高まりなどによって減少し、村で養うことのできる人口が減少し、過疎現象を引き起していると考えられる。

離村理由を考える時、経済的条件ばかりには限定できない。「教育」の問題がそれである。前述したように、結局は経済的条件になることが多いかもしれないが、「子供の教育のため」(7.6%)といった見方もあり、都会を教育を受ける場として積極的に志向する人びともいる。裏がえせば過疎地域における教育の場の貧困さを示す。

「子供と同居するため」(3.8%)は、子供を離村させ(子供が離村し)、子供が都会で定着したところで親が離村する形態である。

村での生活継続拒否要因としての経済的な要因については前述したようである。「次・三男であるから」(12.0%)という理由は、実際には過疎地のような耕地面積の少ないところでは、昔から次・三男はその村で分家することもなく離村することが多かったと思われる。この12%の解釈は、被面接者のうち12%の人が離村するにあたり、村での生活継続拒否要因として「次・三男であること」を問題として取り上げたという意味である。残念ながら調査の不徹底さもあって、現実に次・三男の人が被面接者の中に何人存在したのかわからず、次・三男の離村者のうちどの程度の人びとが、離村するにあたり「次

表33 離村理由<sup>†</sup>

離 村 理 由		地 域					
		上 村	坂 内 村	頓 原 町	高 森 町	京 極 町 等	計
都会へ出る目的	進学するため	4 (13.3)	5 (13.5)	2 (6.5)	3 (10.7)		14 (8.9)
	働きながら学ぶため	2 (6.7)	4 (10.8)	3 (9.7)	1 (3.5)		10 (6.3)
	就職するため	11 (36.6)	14 (37.8)	13 (41.9)	11 (39.3)	3 (9.4)	52 (32.9)
	結婚するため	1 (3.3)					1 (0.6)
	子供の教育のため		2 (5.4)	2 (6.4)	4 (14.3)	4 (12.5)	12 (7.6)
	子供と同居するため			1 (3.2)	1 (3.5)	4 (12.5)	6 (3.8)
	都会へのあこがれ	2 (6.7)	2 (5.4)	2 (6.4)		1 (3.1)	7 (4.4)
拒村での生活継続要因	次・三男であるから	9 (30.0)	4 (10.8)	4 (12.9)	2 (7.1)		19 (12.0)
	村で働く場所がない	12 (40.0)	8 (21.6)	9 (29.0)	4 (14.3)		33 (20.9)
	災害があって生活できなくなった	3 (10.0)	4 (10.8)	2 (6.4)		1 (3.1)	10 (6.3)
	事情の変化があり生活できなくなった	5 (16.7)	4 (10.8)	6 (19.4)	6 (21.9)	20 (62.5)	41 (25.9)
	農業に対する不安					5 (15.6)	5 (3.2)
	転勤のため				2 (7.1)	2 (6.3)	4 (2.5)
	その他		2 (5.4)	2 (6.4)	2 (7.1)	2 (6.3)	8 (5.1)
総 数 (被面接者数)		30	37	31	28	32	158

† ( ) は%, 母数は総数 表34, 表35も同様。

・三男であること」が村での生活継続を拒否する圧力として感じたかは不明である。

地域別に離村理由を検討してみると、まず上村と京極町等は、村での生活継続拒否要因すなわち、「村では～なので生活できないため」という考え方を強く持ちながら離村をしている。これは上村、京極町等の離村者が、離村することへのこだわり、消極性を示し、村への未練を持っていると考えられる。これとは逆に村へのこだわりが薄い地域は、高森町と坂内村である。都会へ出る目的についてみると、上村、坂内村、頓原町、高森町はほ

ぼ同じような傾向で都会へ出る目的を持っている。京極町等は都会へ出る目的についてはあまりふれておらず、内容も子供に関する事柄が多いのが目立つ。その他項目を検討すると、上村の「次・三男であるから」(30.0%)という理由、京極町等の「事情の変化があり生活できなくなった」(62.5%)「農業に対する不安」(15.6%)という理由が多い。

B-3-2 年齢と離村理由について

離村理由と年齢との関連をみたのが表34である。都会へ進学するために離村した者は、現在の年齢が20代、30代

表34 離村理由と年齢<sup>†</sup>

離 村 理 由	年 齢					
	10代	20代	30代	40代	50代	60代以上
進学するため		4 (18.2)	8 (16.0)		1 (3.4)	
働きながら学ぶため			7 (14.0)	2 (5.0)	1 (3.4)	
就職するため	1 (33.3)	15 (68.2)	19 (38.0)	9 (22.5)	4 (13.8)	4 (30.8)
結婚するため			1 (2.0)			
子供の教育のため			2 (4.0)	6 (15.0)	2 (6.9)	2 (15.4)
子供と同居するため					3 (10.3)	3 (23.1)
次・三男であるから	1 (33.3)	3 (13.6)	11 (22.0)	3 (7.5)	1 (3.4)	
村で働く場所がない	1 (33.3)	8 (36.4)	11 (22.0)	9 (22.5)	3 (10.3)	1 (7.7)
災害があって生活できなくなった		1 (4.5)	4 (8.0)	4 (10.0)	1 (3.4)	
事情の変化があり生活できなくなった		1 (4.5)	9 (18.0)	11 (27.5)	14 (48.3)	6 (46.2)
農業に対する不安				2 (5.0)	3 (10.3)	
総 数	3	22	50	40	29	13

† 「進学するため」の1名年齢不明のため157名を分類。

の人が多い。働きながら学ぶことが目的で都会へ出た者は、50代、40代、30代と増加しとくに30代の者が目立つ。就職する目的で都会へ出た者は20代の者が他の年代の者に比して非常に多い。子供の教育のために都会へ出た人は、30代以上の年代でみられ、40代、60代が多い。子供と同居するためには、50才以上の人にみられ、しかも60才以上の人に多い。

進学を目的として都会に出ることは、村あるいは村の近くに学校、とくに高等学校が存在するかどうかといった施設の状況や、教育を受けることへの関心の強さなどが影響してくるであろう。年代的にみれば、30代の者が高校進学する時期、今から20年前頃から教育を受けたいと希望する人びとの要望に十分応じられるような施設が伴わず、都会へ出ることによってそれを満たそうとして離村した者が増加してきていると推測される。教育への関心の強さは、「働きながら学ぶため」に都会に出た者が50代からあり、漸次増加し30代で最も多くなっている点をみれば、古くから芽ばえているようである。しかも最初の頃はいわゆる勤労学生として離村が始まり、30代の者になると進学一本に目的をしばって都会へ出るようになった者が増加し、20代の者は、都会へ出て教育を受けることは、「進学のため」のみになる。さらに、後述するように、「子供のために」挙家離村したことが40代、60代に多くみられるようになってきている。

村での生活継続拒否要因としては、「次・三男であるから」とするものが、10代、30代の者に多く取りあげられているが、10代の者はサンプルが少ないので考慮せねばならないだろう。「村で働く場所がない」とする者は、都会へ出る目的「就職するため」と同じように若い者ほど強く感じている。「事情の変化があり生活できな

くなった」とする者は、高年齢の者ほど多く、村へのかかり方の強さ、事情の変化に影響されやすさを感じさせる。

年代別に離村理由をみると、20代の者は、職場を求めて離村した傾向が最も強く、つぎに教育の場を求めて離村した者が多い。また他の年代の者に比較して、都会へ出る目的が、村での生活継続拒否要因よりも多く取りあげられている。30代の者の離村理由は多様であり、他の年代に比較して離村理由の偏りが少ない。40代、50代の者は、村での生活継続拒否要因への回答が多く、しかも事情の変化に影響された傾向が強く、「やむなく村を出た」という感じを受ける。

### B-3-3 離村理由と離村時期

ここでは離村理由と離村時期との関連について分析する。

都会へ出る目的のうち教育に関する面をまず取り上げてみると、前項で推察した面がより一層明白になってくる。「働きながら学ぶため」に都会へ出た者は、昭和22年以前の被面接者の16.7%あり、勤労学生としての離村が割に多い。その傾向は昭和23年～27年に最も顕著になり、それ以後漸次減少している。都会へ出ることによって教育を受けたいと要求する者は昭和23年～27年に全体の43.8%にも達する。そしてこの時期を過ぎると、都会において教育を受ける要求は少なくなり、しかも、勤労学生として教育を都会で受けるよりも、教育的な側面だけを目的として「進学のため」に離村する割合が強くなる。教育を受けるための都会への流出の減少は、教育施設（高校新設など）が村の近くに整備されてきたためであろう。しかし昭和28年以降、教育を受けるための離村の減少とは逆に、子供に教育を都会で受けさせるための

表35 離村理由と離村時期

離 村 理 由	離 村 時 期						
	昭和43年 以 降	38年～ 42年	33年～ 37年	28年～ 32年	23年～ 27年	22年以前	
進学するため		3 (9.4)	2 (6.9)	5 (19.2)	3 (18.8)	1 (8.3)	
働きながら学ぶため		1 (3.1)	1 (3.4)	2 (7.7)	4 (25.0)	2 (16.7)	
就職するため	8 (18.6)	13 (40.6)	13 (44.8)	10 (38.5)	4 (25.0)	4 (33.3)	
結婚するため			1 (3.4)				
子供の教育のため	4 (9.3)	5 (15.6)	1 (3.4)	1 (3.8)		1 (8.3)	
子供と同居するため	5 (11.6)					1 (8.3)	
次・三男であるから	3 (7.0)	1 (3.1)	5 (17.2)	6 (23.1)	4 (25.0)		
村で働く場所がない	2 (4.7)	12 (37.5)	11 (37.9)	3 (11.5)	3 (18.8)	2 (16.7)	
災害があって生活ができなくなった	1 (2.3)	3 (9.4)	4 (13.8)	2 (7.7)			
事情の変化があり生活ができなくなった	21 (48.8)	9 (28.1)	4 (13.8)	5 (19.2)	2 (12.5)		
農業に対する不安	5 (11.6)						
総 数	43	32	29	26	16	12	



離村が増加している。おそらく親または子供、あるいは両者の教育の質的な要求水準の高まりがそうさせたのであろう。したがって教育的な視点から離村形態の変化をみれば、勤労学生としての単身離村(昭和27年頃まで)、高校進学のための単身離村(昭和23年頃から32年頃まで)、そして子供の教育のための挙家離村(昭和38年頃より)となる。

都会に職場をを求める傾向は、村における職場のなさに対する不満と対応している。時期的には、昭和28年以降特に離村の理由として、職場の問題が取り上げられてくる。昭和43年以降数字の上では都会へ出る目的としての就職の比率が大きく減少しているが、この項目をさらに地域別で分析してみると、上村、坂内村、頓原町、京極町等は昭和38年～42年と比較して減少しているわけではなく、高森町が若干減少しているのみである。これは、京極町等のサンプルで昭和43年以降の離村者が大多数を占め、さらに「事情の変化があり生活できなくなった」に回答が集中したためである。

「子供と同居するため」に離村した者は、京極町等に多く、昭和43年以降が大多数である。子供をまず都会へ出し、子供が都会で定着した近年、都会へ自分たちも離村するという二段構えの離村形態なのであろう。

離村理由に「次・三男であるから」を挙げている者は、昭和23年～27年をピークに年々減少している傾向がみられる。これは次・三男の離村が減少したということではなく、次・三男だから離村しなければならないという村での生活継続拒否としての圧力が離村者にとって薄らいできているのだと解すべきであろう。いわば離村の理由としてあえて取り上げる要因でなくなり、当然のこととして離村者に受け取られてきているのであろう。しかし、早い時期に離村した者にとっては、次・三男である

から村には居られないという圧力を感じ、次・三男であるがゆえに離村するというこだわりを持って離村したのであろう。

災害による離村は、災害が生じた時期が各地域で一致しないから、十分分析できないが、坂内村に関しては伊勢湾台風がその要因として強く働いているようである。

「事情の変化」「農業に対する不安」は京極町等にとくに特徴的で、この4年間に集中し、離村の理由になっている。他の地域では時期的な関連はあまり明白ではない。

離村時期と離村理由との関連からみた地域的な特徴としては、高森町、坂内村が早くから離村が進み、離村理由・離村方法の傾向も他地域の流れよりも早めにその徴候を示している(詳しい分析は本報告では省略する)。

京極町等は他地域とは異なった傾向を示すが、これはサンプリングの偏りであるのか、この地域特有のパターンであるのかは明白でない。

#### B-3-4 離村方法について

離村方法については集団離村、および不明については分析から除き、挙家離村と単身離村を分析した。

離村方法と離村時期については表36、離村方法と離村理由については表37にその結果を示した。京極町等は100%挙家離村である(サンプリングの偏りがあるかもしれない)。しかも、この4年間に「事情の変化」のため大多数が離村をしている。京極町等とは逆に頓原町は、単身離村が83.9%と高い。頓原町の単身離村は昭和23年頃から始まっている。挙家離村は、昭和38年頃から離村そのものも他地域と比較して歴史が新しいといえるであろう。坂内村、高森町は他地域と比較して早くから挙家離村が始まり、年々挙家離村の方法で離村する形態の率が高まってきている。上村は昭和28年～32年にか

表36 離村方法と離村時期<sup>†</sup>

地 域	方 法	離村時期							計
		昭和43年 以 降	38年～ 42年	33年～ 37年	28年～ 32年	23年～ 27年	22年以前		
上 村	挙家離村	2 (66.7)	1 (14.3)	2 (33.3)	4 (36.4)				9 (30.0)
	単身離村	1 (33.3)	5 (71.4)	4 (66.7)	7 (63.6)	2(100.0)	1(100.0)		20 (66.7)
坂 内 村	挙家離村	1(100.0)	2 (40.0)	2 (15.4)	1 (16.7)	1 (14.3)			7 (18.9)
	単身離村		3 (60.0)	11 (84.6)	4 (66.7)	5 (71.4)	3 (60.0)		26 (70.3)
頓 原 町	挙家離村	2 (50.0)	2 (13.3)						4 (12.9)
	単身離村	2 (50.0)	12 (80.0)	5(100.0)	5 (100.0)	2(100.0)			26 (83.9)
高 森 町	挙家離村	5(100.0)	2 (50.0)	1 (20.0)		1 (20.0)	1 (16.7)		10 (35.7)
	単身離村		1 (25.0)	4 (80.0)	2 (66.7)	3(100.0)	4 (66.7)		14 (50.0)
京 極 町 等	挙 家 離 村	30(100.0)	1(100.0)			1(100.0)			32(100.0)

<sup>†</sup> ( ) は%, 母数は各地域別の離村時期別総数

表37 離村方法と離村理由

地域	方法	離村理由									
		進学	働か ながら 学ぶ	就職	子供 の教 育	子供 と 同 居	次・三 男	働く 所 が ない	災害	事情 の 変 化	農 業 不 安
上村	挙家離村			1			3	3	2	3	
	単身離村	4	2	10			6	8	1		
坂内村	挙家離村		1	1	1			2	1	3	
	単身離村	4	2	12	1		4	6	3	1	
頓原町	挙家離村			1	1	1		1	1	2	
	単身離村	2	3	11	1		3	7	1	5	
高森町	挙家離村	1		3	3					2	
	単身離村	2	1	7			2	4		3	
京極町	挙家離村			2	4	4			1	20	5

けて急に多くの挙家離村が始まり、年々その比率は減少しているが昭和43年以降また挙家離村の比率が高まっている。

単身離村の場合には、「村で働く場所がない」ので都会へ出たり、「就職のため」に積極的に都会へ出たりする場合が最も多い。また「次・三男であるがゆえに」村を離れねばならないと考える者が多く、「進学のために都会へ出る」がそれに続く。一方挙家離村は、京極町等の偏りを考慮に入れても「事情の変化があり生活ができなくなった」ために離村した者が多い。また単身離村者が都会へ目的的に出ていくことが多いのに対して、挙家離村者は、「村での生活継続拒否要因」があるために、村に未練を残し離村していくようである。とくに上村の挙家離村者は、村への想いを残して離村していったように思われる。逆に高森町の挙家離村者は、都会へ出ていくのに、村よりも都会への志向性が強い。

過疎現象は一般的には、単身離村者が就職のために都会へ流出することによってその始まりを告げ、「事情の変化」をきっかけに挙家離村という形態が増してくるようである。村と離村者のかかわり、結びつきは、村全体のおかれている状況、個人の状況、離村形態、過疎現象の歴史などによって変化していくものようである。

(永田忠夫)

### C. 出身地とのつながり

#### C-1 離村理由を軸として

この項においては、離村者の「ふるさと」に対する意識、態度について、離村理由という過去の態度決定を軸として検討を加えることを目的とする。

いわゆる「離村者」と「ふるさと」とのつながりの問

題は、決して今日に特有の問題ではなく、その意味で過疎現象に固有の本質的問題とはいえない。しかし、かつての時代における両者の関連が、都会の冷たさを癒してくれる心の支えとしてのあたたかいムラであり、帰ろうと思えば生活のできる故郷であったのに対し、今日の過疎地域を典型とするムラは、現実には生活するに諸種のハンディキャップの伴う、崩壊しつつある点にある。この現状を体験しつつ村を離れた人びとが、どのような目で「ふるさと」を見、また自己の将来との関連で対処しようとしているのか、を離村理由を類型化する手続きに則して明らかにしようとするものである。

#### C-1-1 離村類型の抽出

前表6の「離村の理由」の質問をもとに、各地域ともに全般的に頻度の少ない理由項目(A, D, F, G)および「その他(L)」を除外し、最終的に離村理由を次の3類型にまとめた。類型Ⅰは「離村の理由」のB, C, Eの項目に属し、自ら積極的に村を離れて都会で生活を志向した群であり、これを「積極的離村型」と名付ける。類型Ⅱは、本人の意志とは必ずしも関わりなく、外的な制約条件から都会で生活することを志向した群で、「離村の理由」のH, Iがこれに該当し「消極的離村型」と名付ける。類型Ⅲには「離村の理由」のJ, Kの項目が属し、かつては村内で生活を営みながら、災害や事情の変化で止むを得ず離村した群で、これを「状況変化型」と一応の命名を行なうものとする。

ところで、この「離村の理由」の質問は、回答においてダブル・チェックが認められていることから、上記の3類型のいくつかにまたがった反応もみられ、それらを含めて一括して示すと表38のようになる。表にみられるよ

表38 離村類型の地域別特徴

地 域 類 型	地 域					合 計
	上 村	坂内村	頓原町	高森町	京極町等	
I (積極的離村型)	8	16	15	15	1	55
II (消極的離村型)	5	5	3	0	1	14
III (状況変化型)	5	5	6	4	19	39
I-II 混合型	13	5	4	3	0	25
I-III 混合型	0	2	0	1	2	5
II-III 混合型	1	1	1	2	0	5
I-II-III 混合型	0	1	0	1	0	2
合 計	32	35	29	26	23	145

うに I-II 混合型の事例がかなりあり、したがってこれをひとつの離村類型として設定することも考えられるが、離村理由の類型を分析の主軸として論を展開し、検討を加えることを目的とするうえからも、心理的意味づけの明確化を期して、これらの「亜型」は除外することとした。その結果、表38に明らかなごとく3類型合せて108ケースが有効対象となった。

積極的離村型が全体の半数を占めるのに対し、消極的離村型は最も少ないが、これはむしろ I-II 混合型に吸収された結果とも考えられる。外的制約から村に留まることが出来ない以上、積極的に都市へ志向していった人びとが改めて離村の理由を問われた時、I、IIの両方の反応に共に肯定することになったものと思われる。

地域別にみれば、京極町等は、既に述べたように挙家離村者を調査対象としている関係上、状況変化型に集中する特異な様相を示しており、一方、高森町は理由不明ながら消極的離村型には結果として1事例も該当するものがなかった。こうした、地域によるサンプルの偏りに問題がないわけではないが、本項では地域を一括し、離村理由類型による検討を加えるものとし、地域差の問題には直接立ち入らないこととする。有効サンプルの性別、年齢別の内訳を示せば表39のとおりである。

なお、戸沢村等のサンプルは本項においては一切取上げていないが、それはつぎの理由による。既に「方法」の部分で触れられたように、この地域のサンプルは全員が定時制などの高校在学者であり、たまたま現在「ふるさと」を離れて「都市」で生活しているものの、本来の離村者ではなく（離村予備軍であることが予想はされるが）、本項の分析目的には合致しないと判断したものである。

C-1-2 離村類型にみる「ふるさと」との結合意識

調査票の概要は既に述べられたように4つの内容に大別されるが、C-2とともに本項で取り上げる「ふるさと」に対する態度や意識、および実態を扱った質問群は、さらに次に挙げる4つのカテゴリーに一応分けることができよう。すなわち、(1)ふるさと観、(2)ふるさとへの回帰、(3)ふるさと意識、(4)ふるさととの結合、である。ここではこのうち(1)、(2)、(3)について検討を加えるものである。

なお、ちなみに(4)のカテゴリーに属する質問項目を挙げれば次のようなものである。「現在居住している市に、同郷の人はおられますか〔13〕」、「その人たちと親しく交際しておられますか〔14〕」、「あなたは時々出身地へ帰りますか〔18〕」、「生家へ手紙を出したり、電話

表39 対象者の内訳

	性 別		年 齢 別					合 計
	男	女	~20代	30代	40代	50代	60代~	
I (積極的離村型)	41 (46.6)	14 (70.0)	21 (75.0)	19 (70.4)	8 (34.8)	3 (15.0)	3 (33.3)	55 <sup>†</sup> (50.9)
II (消極的離村型)	13 (14.8)	1 (5.0)	4 (14.3)	3 (11.1)	3 (13.0)	3 (15.0)	1 (11.1)	14 (13.0)
III (状況変化型)	34 (38.6)	5 (25.0)	3 (10.7)	5 (18.5)	12 (52.2)	14 (70.0)	5 (55.6)	39 (36.1)
合 計	88(100.0)	20(100.0)	28(100.0)	27(100.0)	23(100.0)	20(100.0)	9(100.0)	108(100.0)

† 類型 I の坂内村のサンプルに年齢不明者が1名あり、年齢別合計は54である。

表40 「ふるさと観」——出身地と都市の比較——

類 型		I	II	III	χ <sup>2</sup> 値
項 目					
④ 収 入	出身地の方がいい	2 ( 3.7)	0	10 (27.0)	16.02 <sup>**</sup>
	都会の方がいい	45 (83.3)	12(100.0)	22 (59.5)	
	わからない	7 (13.0)	0	5 (13.5)	
⑤ 環 境 活 動	出身地の方がいい	22 (40.0)	6 (46.2)	22 (56.4)	11.80 <sup>*</sup>
	都会の方がいい	29 (52.7)	7 (53.8)	9 (23.1)	
	わからない	4 ( 7.3)	0	8 (20.5)	
⑦ 医 療	出身地の方がいい	0	1 ( 7.7)	0	8.65
	都会の方がいい	52 (96.3)	12 (92.3)	35 (92.1)	
	わからない	2 ( 3.7)	0	3 ( 7.9)	
② つ き 合 い	出身地の方がいい	42 (76.4)	9 (69.2)	30 (81.1)	7.33
	都会の方がいい	7 (12.7)	0	5 (13.5)	
	わからない	6 (10.9)	4 (30.8)	2 ( 5.4)	
⑥ 安 易 さ	出身地の方がいい	27 (49.1)	2 (16.7)	13 (33.3)	7.15
	都会の方がいい	24 (43.6)	7 (58.3)	22 (56.4)	
	わからない	4 ( 7.3)	3 (25.0)	4 (10.3)	

をかけたりますか」・「生家から手紙が来たり、電話がかかたりしますか」(〔19〕～〔24〕)など出身地の人々とのやりとりに関する項目群である。

(1)「ふるさと観」について——このカテゴリーに属する質問項目は、「あなたの出身地は、どうなっていくとお思いですか〔30〕」、「出身地に暮している人々をどうお考えですか〔32〕」、「あなたの出身地と都会を比較して、出身地をどうお考えですか〔33〕」、の3問である。自分の故郷の現状をどのようなものとして認知しているか、を問うたこれらの質問に対し、離村類型という過去の自己の出郷の様相との関連で有意な差のみられたのは〔33〕の15項目のうちの「収入」、「生活環境」の2項目であり、有意な傾向の認められるのは「医療」、「近隣のつき合い」、「暮らしの安易さ」の3項目であった(表40)。「収入」について、いずれの群も都会の方がよいとはしているものの、I、II群に比べ、状況変化型のIII群に出身地の方がよいとする割合が高いことからみても、この群の経済生活における特異性、即ち中年期以後の離村に伴う、都市での就職における単純労働、低賃金が予想される。「生活環境」に関しては、I群が都会を、III群が出身地を、II群が両方に拮抗した反応を示しているのは離村類型そのものの反映として興味深い。一方、「生活環境」と内容が一面似ながらいくらか意味合いの異なる「暮らしの安易さ」の項目では、この関係が逆転している。積極的離村群に出身地の方がよいといわしめる反応の背景には、「近隣のつき合い」の項目にみら

れるような、人間関係などの精神的充足を想定、重視した一種の郷愁からでている反応のような感じがするのに対し、実際に村での日常生活を体験し、物質的不便さを味わってきた状況変化群には、そうした面での「暮らしの安易さ」が重視された結果であるように思われる。

有意な差を示さなかった項目も含めて、〔33〕の15項目の全体的な反応を眺めると、一般に予想されるように、類型の如何を問わず「仕事の厳しさ」、「収入」、「物の購買」、「医療」、「教育」、「交通」、「娯楽」の項目は都会が、「人情」、「近隣のつき合い」、「住居」、「結婚」の項目は出身地がいいと考えられている。これに対し、両者が拮抗した反応を示している項目は、先に挙げた「暮らしの安易さ」を始めとして「葬儀」、「習慣」、「生活環境」の項目である。物質面での生活の享受には満足しながら、人と人との精神的結合に対する要求を満たし得ない離村者、こうした葛藤状況を解決しようとする行動の現われのひとつが、最近のジャーナリズム用語にいう「Jターン現象」なのかも知れない。

3群間に差のみられなかった、出身地の将来の見直しに対する意見を尋ねた〔30〕では、全体の44.9%の人が「ますます人が減る」ことを予想し、「今後盛りかえす」と考えている人は13.1%に過ぎない。「現状維持」の予想も33.6%あるが、離村理由の相違を越えて自己の出身地の将来に悲観的な展望がもたれているところに、従来の離村形態とは異なった、過疎現象のもつ「ふるさ

表41 「ふるさとへの回帰」

類 型		I	II	III	$\chi^2$ 値
項 目					
〔25〕 も こ り の 市 で 一 生 を 終 る つ	その考えである	23 (42.6)	4 (30.8)	24 (64.9)	34.87**
	希望しないがそうなるだろう	3 (5.6)	2 (15.4)	5 (13.5)	
	生家に呼び戻されるだろう	0	1 (7.6)	0	
	年をとったら村へ帰りたい	7 (13.0)	4 (30.8)	3 (8.1)	
	転職するかもしれない	7 (13.0)	0	0	
	他の土地へ移るつもりでいる	9 (16.7)	0	1 (2.7)	
	転任があるのでわからない	2 (3.7)	0	2 (5.4)	
	考えたことがない	1 (1.9)	2 (15.4)	2 (5.4)	
	そ の 他	2 (3.7)	0	0	
〔26〕 村へ帰る ことがあ りうるか	は い	6 (11.1)	5 (41.7)	5 (13.9)	7.07*
	い い え	48 (88.9)	7 (58.3)	31 (86.1)	
〔36〕 え 老 後 を ど う 考 え	出身地でのんびり	8 (15.1)	8 (57.1)	7 (17.9)	31.70**
	都会で楽しく	11 (20.8)	1 (7.1)	5 (12.8)	
	考えたことなし	17 (32.1)	2 (14.3)	8 (20.5)	
	子どもに面倒をみてもらう	3 (5.7)	3 (21.5)	15 (38.5)	
	養老院・老人ホームへ	2 (3.8)	0	1 (2.6)	
	そ の 他	12 (22.6)	0	3 (7.9)	

と」との関連での人間学的諸問題が提起されねばならない由縁であろう。こうした観点から、同じく差のみられなかった〔32〕の、出身地の居住者に対する、離村者としての彼らの態度は、「村を守ってほしいと思う」(37.0%) 「生れたところで生活しているので幸せだと思う」(19.4%)のように大半が「ふるさと」堅持を願っており、離村者の都市生活における意識および行動の **anchoring point** として強く作用していることが窺われるのである。この、一方ではますます村がさびれていくとの展望をもちながら、他方村に残っている人にはしっかり村を守ってほしいという、離村者の身勝手とも思える考え方にこそ、先に触れたのと同じ意味で、従来の離村に伴う離村者一留村者間の心的関係構造とは異質の問題のあることが暗示されている。この点に関しては、以後の分析結果をも踏まえて討論の項で考察したい。

(2) 「ふるさとへの回帰」について——このカテゴリーに属する質問群は次の4項である。「あなたはこの市で一生を終るつもりですか〔25〕」、「何か生家の事情で、また村へ帰って生活することがありうると思いますか〔26〕」、「万一、今の生活がゆきづまったとき、どうされますか〔31〕」、「あなたの老後をどう考えていますか〔36〕」。この4項のうち、〔31〕を除く3項までが離村類型との関連で有意な差を示している(表41)。

表より明らかなように、いずれの場合も離村類型と将来のふるさとへの回帰志向の強さとは対応し、消極的離村群において最も回帰志向性が高く、状況変化群におい

て最も低い。そして、積極的離村群は両者の中間的位置にある。状況変化型は村内で生計を立てることが不可能になったが故に村に見切りをつけて覚悟の上で離村してきた人びとであり、彼らにとって将来再び帰村することは常態では考えられず、好むと好まざるとにかかわらず都市で生活することになると予想している。したがって、現在は自己の意志による決断で都市での生活を選んだものの、老後の生活設計においては、どこを選ぶかという以上に「子どもに面倒をみてもらう」という姿勢が強く打ち出されてくるものと思われる。一方、次三男であったり、村内での働き場所が得られなかったりなど、外的な制約条件から就職に際して離村を余儀なくされるに至った消極的離村群においては、村への回帰志向性は当然のことながら他の群に比べて高くなる。このことは〔25〕、〔36〕の結果が示す通りであり、また〔26〕の「帰村の可能〔性〕に関して「はい」と答えた者の理由をみると、II群では「村にいる長男にもしものことがあれば」、「村によい仕事があれば」、「兄一家が町へ出たがっているの、そのかわりに」といった理由であるのに対し、積極的離村群で帰村の可能性を認める者のすべてが長男であり「村にいる両親が働けなくなったり、どちらかが亡くなった場合」という、長男としての村内での家督相続という消極的な理由によっている。以上の結果からも推察されるように、過去の離村に際しての態度決定の理由が、将来の生活の志向性にまで強く影響を及ぼしていることが窺い知れるのである。

表42 「ふるさと意識」

類 型		I	II	III	χ <sup>2</sup> 値
項 目					
〔37〕 郷子はどこのか故	当然自分の出身地だ	11 (20.0)	5 (35.7)	25 (64.1)	22.46**
	この市だ	25 (45.5)	4 (28.6)	9 (23.1)	
	子どもには故郷はない	2 (3.6)	0	1 (2.6)	
	考えたこともない	3 (5.4)	2 (14.3)	1 (2.6)	
	無 答	14 (25.5)	3 (21.4)	3 (7.7)	
〔39〕 と都会で暮すか	問題なく幸せだ	3 (5.4)	1 (7.1)	3 (7.7)	6.59
	田舎に比べれば幸せだ	18 (32.7)	3 (21.4)	9 (23.1)	
	同じ・わからない	27 (49.1)	5 (35.7)	18 (46.2)	
	田舎の方がまだ幸せだ	7 (12.7)	5 (35.7)	8 (20.5)	
	全然幸せではない	0	0	1 (2.6)	

(3)「ふるさと意識」について——このカテゴリーに属する質問項目は、「あなたのお手さんの故郷はどこだと思われませんか〔37〕」、「人間にとって都会で暮すことは幸せだと思われませんか〔39〕」という、かなり観念的なレベルでの「ふるさと」意識を問うものであった。離村理由類型との関連で有意な差のみられたのは〔37〕である(表42)。

積極的離村群が現在の居住地を「自分の子どもの故郷」とするのに対し、状況変化群は自分の出身地を断然多く挙げ、一方消極的離村群では両者の中間である拮抗した反応を示している。こうした、自己と直結しないかなり観念的な態度においても、自己の離村時のムラとのつながり方のいかんが「ふるさと意識」に反映されていることが明らかにされたといえよう。ただ、この質問には他に比べて異常なほど「無答」が多く、設問自体の難しさを暗示している。

〔39〕は有意な差はみられなかったが、類型による幾分かの差はあるものの、「人間にとって」都会で生活することを肯定する割合が多いことからみて(そうであるからこそ彼らは離村したのであろうが)、彼らの目をムラへ向けさせることは必ずしも容易ではないであろうし、また、一層のムラからの人口流出が予想されることにもなる。ただ、この質問においても離村理由のいかんを問わずはっきり断定的な意見をもたない人が多く(「同じくらい・どちらともいえない・わからない・考えたことがない」46.3%)、前の質問同様の難しさが残されている。

### C-1-3 討 論

離村者の抱いている「ふるさと」に対する態度の諸相を、彼らの過去の離村理由との関連でそれぞれについて分析を加えてきたが、ここでは得られた結果を統合したうえで一般的な側面から考察を試みたい。

まず、離村類型毎の要約的な特徴を述べれば、積極的離村型である類型Ⅰは、一般に現在の生活に満足していると同時に将来も都市での生活を志向し、「ふるさと」に対する特に強い愛着心をもってはいないようである。これに対し状況変化型の類型Ⅲは、村での生活に見切りをつけて離村してきただけに、将来再び村へ帰る意志や可能性などの「ふるさとへの回帰」意識は最も弱いものの、また、生活の利便性の面で都市を志向するものの、去ってきた「ふるさと」への愛着は断ち難く、意識のうえでは現在も「ムラ人」であるといえよう。一方、外的制約条件から予め離村を余儀なくされた消極的離村型としての類型Ⅱは、前二者の中間的位置にあり、「ふるさとへの回帰」意識の強さにみられるような感傷的な郷愁を強くもちつづけている点では類型Ⅲに近く、都市生活のもつ機能性・利便性などの認知や評価においては類型Ⅰに近いといったアンビバレントな状況にある群であるように思われる。

こうした「ふるさと」に対する態度の相違は、離村理由ばかりでなくC-2で述べる将来の見通しに基づく志向性や、後にDで取上げられる現在の適応状況など諸種の条件によって規定されてくるものであろうが、いずれにせよ彼らが現在離村して都会に住んでいるという厳然たる事実から、過疎との関連において彼らの目を「ふるさと」に向けさせることは容易ならざる困難さを伴っている。

第1に、本項でこれまでみてきたように、都市生活への適応の過程において、「ふるさと」が離村者の心のうちにその依り拠として、また意識や行動の判断規準として占めている役割の大きさに関してはかなりの意味もっているものの、「ふるさと」そのものについては離村類型のいかんを問わず全体的にネガティブな反応が上回っており、また類型によって「ふるさと」志向の強いも

のがみられるものの、それらは感傷的な色彩の濃いもののように思われることから、そう考えざるをえない。第2に、都会との経済的・文化的格差が歴然としていることを、離村者自身が身をもって体験しているという、実態的レベルからの判断において、さらにまた、今や「ふるさと」が、明治以来の日本の経済を支える原動力となってきたかつての離村者たちが描いていたような“錦を飾る”場所でも“遠くに在りて想うもの”でもなく、また“都会の孤独”に対置される“農村のあたたかさ”が約束される場所でもないという、社会の流れのレベルからの判断においても、この人口の流れを変えることの難しさを感じないわけにはいかない。第3に、これら離村者の「ふるさと」である過疎地域町村に現に居住している人びとと自身が、ムラは崩壊に瀕していると認知し、離村していく人びとを仕方のない、止むを得ない現象と受け止めているところに決定的な根の深さがあるといえよう。

人口の都市集中化が強まれば強まる程、形態的な故郷喪失者(Heimatlose)が増えるが、それとともに積極的離村者群を典型とする、「ふるさと」に特別な感情ももたず、語りつぐこともしない、人間の精神生活の原点としての「ふるさと」をも喪失した人びとの増加することもまた確実に予想されるのである。そしてそれは、上に述べたように現実のムラが崩壊の過程を辿るにつれていよいよ大きくなるであろう。そうであるならば、離村者の目を都会とは反対の方向へ向けさせるには、彼らが離村に際して決意した心理的契機に倍する力をもった誘因を用意せねばならないが、局部的には「Uターン」「J

ターン」現象が現われ始めたとジャーナリズムが報道するものの、大きな流れにまでなっていないのが実状であり、留村者の問題のみならず離村者の問題をも抱えているところに、過疎化現象のもつ事の重大さと解決の難しさがあるといえよう。 <植村勝彦>

### C-2 出身地への志向性を軸として

この項においては、村を離れて都市で生活しているものについて、将来の見通しに基づいた出身地への志向性、すなわち「出身地志向的」か「都市志向的」かを軸にして類型化を行ない、その中で特徴的と思われる類型をとりあげ、その類型間の比較を行ないながら、出身地への志向性に関連する諸特徴や諸要因についての検討を行なう。

#### C-2-1 類型の抽出

得られた6地域全事例の面接資料に基づき、その中の「あなたはこの市で一生を終るつもりですか〔25〕」と、「あなたの老後をどう考えていますか〔36〕」の2項目への応答のパターンから、表43に示すように分類した。そして、「出身地への志向性」という観点から、心理的な意味づけが容易だと思われる3群を、分析の対象としてとりだすことにした。

類型Ⅰは、老後を出身地でのんびり暮らしたいと考え、そのつもりでいたり、あるいはその可能性を認めている群であり、「出身地志向型」ということができる。

類型Ⅱは、老後を都会で楽しく過ごしたいと考え、その可能性を認めている群であり、「都市生活志向型」ということができる。

類型Ⅲは、都市生活を受容しながらも、将来の見通し

表43 「出身地への志向性」の諸類型

項	目	〔36〕 あなたの老後をどう考えるか				計
		出身地で のんびり(A) <sup>†</sup>	都会で 楽しく(B)	考えたこ となし(C)	そ の 他 (D, E, F)	
〔25〕 この 市で 一生 を終 るか	その考え (A)	10	Ⅱ 33	Ⅲ 22	53	118
	そうになってしまう (B)	( 4.2)	(14.0)	( 9.3)	(22.5)	(50.0)
	生家へ戻る (C)	I <sup>††</sup> 25	0	5	3	33
	年をとったら帰りたい (D)	(10.6)		( 2.1)	( 1.3)	(14.0)
	考えたことなし (E)	16	6	36	27	85
	その他(E, F, G, その他)	( 6.8)	( 2.5)	(15.3)	(11.4)	(36.0)
計		51 (21.6)	39 (16.5)	63 (26.7)	83 (35.2)	236 (100.0)

† ( ) 内の記号はもとの調査票の項目記号をあらわす。合成されている場合がある(以下表44, 表46, 表48, 表49についても同様)

†† 分析対象となった類型群および類型番号

表44 3類型の出身地域別出現数

類 型	地 域						計
	上 村	坂内村	頓原町	高森町	京極町等	戸沢村等	
I 出身地志向型	4 ( 10.8)	13 ( 34.2)	0	5 ( 12.5)	1 ( 2.5)	2 ( 4.9)	25 ( 10.6)
II 都市志向型	3 ( 8.1)	6 ( 15.8)	9 ( 22.5)	10 ( 25.0)	4 ( 10.0)	1 ( 2.4)	33 ( 14.0)
III 都市肯定型	3 ( 8.1)	4 ( 10.5)	4 ( 10.0)	6 ( 15.0)	4 ( 10.0)	1 ( 2.4)	22 ( 9.3)
そ の 他	27 ( 73.0)	15 ( 39.5)	27 ( 67.5)	19 ( 47.5)	31 ( 77.5)	37 ( 90.3)	156 ( 66.1)
計	37 (100.0)	38 (100.0)	40 (100.0)	40 (100.0)	40 (100.0)	41 (100.0)	236 (100.0)
$\chi^2$ 検定 (全体 : 53.53)**	$\circ$ —*— $\circ$ $\circ$ —**— $\circ$ $\circ$ —**— $\circ$ $\circ$ —**— $\circ$ $\circ$ —**— $\circ$ $\circ$ —**— $\circ$						

が必ずしも明確でないことから、かなり消極的な意味を含めながら「都市生活肯定型」ということができる。

この3類型に該当するのは80事例であり、全体236事例のうちの33.9%にすぎないのであるが、志向性の心理的な構造にまで検討を進めようとするときは、あいまいな事例を含めるよりは、このように限定する方が有効であろうと考える。

なお、志向性に関連する項目は、表45での分析にも見られるように、他にも認められるが、分布の偏りの問題や、類型をあまりに細分化することを避ける意図もあって、上記2項目に限定して類型化を行なった。

C—2—2 類型出現の地域差

表44は3類型が地域毎にどのように出現しているかを見たものである。〔25〕及び〔36〕それぞれについての地域差の分析は、すでにA—2でなされたところであるが、この志向型においても、少なからず地域差が認められた。まず特徴的なものとしては、坂内村出身者に見られる「出身地志向型」の多さである。これは他地域とは際立った特徴をなしており、高森町以外の4地域との間に有意差が見られる。坂内村の事例の面接調査の際に、「車をとばせば2時間で家に着ける」「村を離れたという気がしない」といった旨の発言のあったことを記憶しており、時間的にも心理的にも非常な近さを感じているようである。第2には、頓原町出身者および京極町等出身者における「出身地志向型」の少なさが特徴的である。特に頓原町の場合は、京極町等を除く他の4地域と

の間になんらかの差が見出されている。これは、村に居住する者を対象とした調査において、不安定であったり投げやりな態度を示す者が多く、「過疎にならねば解決がつかん」と見ている事実(松田ほか, 1972)に対応する構えのように思われる。そして、第3には、戸沢村等出身者において目立つ傾向であるが、3類型のいずれにも属さない者が多い点で特徴的である。これは、すでに触れたように、面接対象者の性質によるところが大きく、ほとんど定時制高校在学中であるために、明確な志向性が示されなかったのであろう。

このような地域差自体も重要な問題であるが、ここで

表45 志向性の強さ

項 目	類 型			計
	I	II	III	
〔26〕† は い	12	0	2	14
ムラで生活することがあるか	8	32	20	60
無 答	5	1	0	6
〔31〕†† 出身地へ引揚げる (A)	7	5	2	14
今の生活がゆきづまったら 都会で頑張る (B)	8	24	14	46
わからない (C)	10	4	6	20
計	25	33	22	80

†  $\chi^2=32.78^{**}$  (I・II\*\*, I・III\*\*, I・III)

††  $\chi^2=11.35^*$  (I・II\*\*, I・III)



は事例数が限定されていることもあって、地域を一括し、地域差を無視した形で、各類型の特徴について比較検討を進めていくことにする。

### C-2-3 志向性の強さについて

はじめの類型化においては〔25〕と〔36〕を用いているのであるが、その志向性を裏づける項目として〔26〕と〔31〕があり、その2項目をここでとりあげる。いずれも有意差が得られている。〔26〕では、類型Ⅰ（以下Ⅰ群とする）に出身地での生活の可能性について認めているものが多いのに対し、類型Ⅱ（以下Ⅱ群）ではその可能性を認める者は誰もいない。類型Ⅲ（以下Ⅲ群）でもほとんどの者が出身地での生活の可能性を否定している。〔31〕の「生活がゆきづまる」という極限状況の場合も、Ⅱ・Ⅲ群では出身地へ引揚げようとする者は少なく、Ⅰ群では引揚げようとする者、あるいはわからないとする者が多くなっている。

以上の結果および各群間の有意差のあらわれ方などから、Ⅰ群が「出身地志向」で一貫しており、Ⅱ・Ⅲ群が「出身地志向性」を持たないことで一貫していることも確かめられたといつてよいであろう。

### C-2-4 ふるさと観について

ふるさと観に関する項目を表46及び表47にまとめた。ここでは、自分の出身地を現在どのようなものとして認知しているかが問題となる。

〔30〕、〔32〕共に有意差はみられず、出身地がどうなっていくか、出身地で暮している人をどう思うかという点で、3群間に違いがあるとは言えない。表46から見て、

表46 「ふるさと観」——出身地の将来  
および出身地の人に対する態度——

項目	類型	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	計
〔30〕† 出身地は どうなっ ていくと 思うか	開けて盛りかえ(A)	3	3	1	7
	現状維持 (B)	10	6	10	26
	ますます人が減(C)	10	23	9	42
	考えたことなし・ その他 (D・E)	2	1	2	5
〔32〕†† 出身地に 暮してい る人をど う思うか	可哀想だ (A)	1	6	3	10
	仕方がない (B)	3	6	4	13
	幸せだ (C)	9	13	8	30
	村を守ってほしい (D)	12	8	7	27
計		25	33	22	80

†  $\chi^2=8.53$

††  $\chi^2=5.18$

Ⅱ群がいくぶん出身地の将来を悲観的に見る者が多いと思える程度であり、いずれにしても現状維持以上にはよくなると思っており、村に暮している人が村を守ってほしいと希望している者が多くなっているのである。

表47は、出身地と都会を比較した結果であるが、全体として有意差がみられ、Ⅰ群は明らかに他の2群よりも出身地の良さを認めることが多く、逆にⅡ・Ⅲ群はⅠ群に比して都会の良さを認めることが多くなっている。全15項目のうち分散が大きいと思われる項目のみをとりだしたところ、「住居」「葬儀」および「生活環境」の項目に有意差がみられた。全体を通して、Ⅰ群に属する人は出身地の方がいいと考えているのであるが、上の3項目については特に、出身地の方をよしとする人が多くみられる。

一方、Ⅱ群では、都会の方がよいと考えているが、「暮らしの安易さ」「住居」「葬儀」「習慣」「生活環境」などで、都会の方をよしとする傾向が目立っている。

Ⅲ群は、全体としてはⅡ群に近い反応のパターンを示しているであるが、表46の〔30〕や表47の「暮らしの安易さ」、「習慣」などではⅠ群に近いパターンが見られるなど、出身地との関係でアンビバレントな感情状態にあることが予想される。

このような3群間の差異にもかかわらず、いずれの群においても、全体としては、都会の方がよしとする応答の方が、出身地をよしとする応答を上まわっているという事実は、改めて認識しておかなければならない。また、この点は、後の考察でさらに総括的に検討したい。

### C-2-5 ふるさと意識について

ここでは、「子どもの故郷は自分の出身地かそれとも都会か〔37〕」、「都会で暮すことと田舎で暮すことではどちらがより幸せか〔39〕」、という2項目への応答から、故郷に対してどのような態度をもっているかを見ようとする。表48に示したように、〔37〕には有意差が見られなかったが、〔39〕では有意差がみられ、Ⅱ群では積極的に都市生活を受け入れようとする構えの者が多いことがうかがわれる。このふるさと意識については、Ⅰ群では、出身地志向的な者もあるが、むしろ決めかねている様子、アンビバレントな態度がうかがわれる。Ⅲ群は、ここでもⅠ群に近い応答パターンを示しており、同じくアンビバレントな状態にあると考えられる。

### C-2-6 各群の一般的特徴

ここでは、これまでに分析してきた以外に、出身地とのつながりや志向性に関連すると思われるいくつかの面接項目についての分析を試みる。表49に結果をまとめて

表47 「ふるさと観」——出身地と都市の比較——

項目		類 型	I	II	III	計
〔33〕† 出身地と 都市との比較 (15項目合計)	出身地の方がいい		127 (33.9)	98 (19.8)	83 (25.2)	308 (25.7)
	都会の方がいい		170 (45.3)	325 (65.7)	196 (59.4)	691 (57.6)
	わからない・無答		78 (20.8)	72 (14.5)	51 (15.4)	201 (16.7)
回 答 数 合 計			375 (100.0)	495 (100.0)	330 (100.0)	1,200 (100.0)
⑥ 安 暮 易 し さ の	出身地の方がいい		9	6	8	$\chi^2$ 値 4.67
	都会の方がいい		11	23	11	
	わからない		5	4	3	
⑪ 住 居	出身地の方がいい		18	10	6	13.38** (I・II*, I・III*)
	都会の方がいい		3	15	10	
	わからない		4	8	6	
⑬ 葬 儀	出身地の方がいい		9	5	7	17.30** (I・II**)
	都会の方がいい		4	23	9	
	わからない		12	5	6	
⑭ 習 慣	出身地の方がいい		6	5	7	4.54
	都会の方がいい		8	18	9	
	わからない		11	10	6	
⑮ 生 活 環 境	出身地の方がいい		16	9	8	9.11 (I・III*)
	都会の方がいい		5	18	10	
	わからない		4	6	4	
計			25	33	22	

†  $\chi^2=37.44$  \*\* (I・II\*\*, I・III\*\*)

表48 「ふるさと意識」

項目		類 型	I	II	III	計
〔37〕† 子どもの 故郷はどこか	自分の出身地 (A)		10	11	10	31
	この市 (B)		6	17	8	31
	その他 (C・D・E)		9	5	4	18
〔39〕†† 都会で暮 すことは 幸せか	幸せだ (A・B)		5	22	9	36
	どちらともいえぬ (C)		11	9	9	29
	田舎の方が幸せ (D)		8	1	4	13
	その他 (E・その他)		1	1	0	2
計			25	33	22	80

†  $\chi^2=6.34$

††  $\chi^2=16.34$  (I・II\*)

示した。

調査時点での年齢や離村時期については、3群の間に有意差はみられず、対象者の年齢の中も広く、離村の時期も最近に属する者から20年以上前になる者まで幅広く含まれている。対象者が長男であれば、現実的に出身地への回帰も要請されようかと思われたのであるが、3群間に、同胞順位での差異はみられなかった。また、生家の財産も、出身地志向性を引き出す要因にはなりえていないようである。離村の理由についても、I群に「都会で働くため」といった積極的理由が少なめであり、II群に「村に居られなくて」といった消極的理由が少なめであるだけで、差として指摘できるほどではない。しかし、離村時の自信については有意差がみられ、都市志向型のII群では、十分自信があり、大いに頑張ろうとしていた者が多いのに対し、出身地志向型のI群では、あまり自

表49 各類型の一般的諸特徴

項 目		類 型			I	II	III	計	$\chi^2$ 値
年 齢	～ 29歳				5	5	4	14	6.02
	30歳～ 39歳				8	10	12	30	
	40歳～ 59歳				11	15	6	32	
	60歳～				1	3	0	4	
形 住 居 態 の	持 借 家・ア パ ー ト・間 借 り				8	21	6	35	10.02
	そ の 他				11	7	8	26	
					6	5	8	19	
職 業	自 営 商 工 業 主				3	1	4	8	21.32** (I・II**)
	商 工 業・生 産 工 程 従 業 者				7	4	4	15	
	事 務 販 売・公 務 員・専 門 職				3	22	11	36	
	そ の 他				12	6	3	21	
同 胞 内 順 位	長 男				13	18	8	39	1.90
	そ の 他				12	15	14	41	
生 家 の 財 産	山 6 町 以 上				6	9	5	20	3.03
	林 1 町 ～ 5 町				3	1	1	5	
	不 0 ～ 0.9 町 明				8	10	8	26	
	田 1 町 以 上				8	13	8	29	
畑	0.5 町 以 上				9	9	5	23	8.06
	0.5 町 ～ 0.9 町				7	5	1	13	
	未 満 明				4	11	9	24	
	不 明				5	8	7	20	
〔3〕 離 村 時 期 (何 年 前)	～ 9 年				12	13	12	37	2.91
	10 年 ～ 19 年				8	11	8	27	
	20 年 ～				5	9	2	16	
〔4〕 離 村 理 由 (一 部 分)	都 会 で 働 く た め (B・C・E・F)	{はい いいえ			10 15	17 16	11 11	38 42	0.81 1.49
	村 に 居 ら れ な く て (H・I・J・K)	{はい いいえ			13 12	13 20	12 10	38 42	
〔7〕 離 村 時 期 の 自 信	十分自信あり (A)				3	17	9	29	13.42* 10.10* (I・II*)
	あまり自信なし (B)				9	3	7	19	
	何も感じなかった (C・無答)				4	5	2	11	
	不安だった (D・E)				9	8	4	21	
〔16〕 こ の 市 の 住 民 に な っ た か	大いに頑張ろう (a)				5	17	10	32	12.92* 5.19
	何とかなる (b)				16	8	9	33	
	その他 (c, d, e, 無答)				4	8	3	15	
	都会人になった (A・B)				6	20	8	34	
〔18〕 帰 村 回 数	半分程度 (C)				2	5	4	11	12.92* 5.19
	都会人になれてない (G・H)				5	1	2	8	
	そ の 他 (D・E・F・無答)				12	7	8	27	
〔28〕 親 しい 友 人 は	年 1 2 回 以 上				9	7	3	19	5.19
	年 1 1 回 ～ 6 回				3	3	5	11	
	年 5 回 以 下				13	23	14	50	
〔28〕 親 しい 友 人 は	出身地の友人 (A・B)				11	9	8	28	3.04
	どちらともいえない (C・D)				7	9	4	20	
	この市の友人 (E・F)				7	15	10	32	
計					25	33	22	80	

信がなく、何とかなるだろうという気持で村を離れてきた者が多いのである。

そして現在、都市志向型の群では、自分の持家に住んでいる者が多く、職業も事務・販売、公務員、専門職など、身分的にもより安定した状態にあることをうかがうことができる。意識の上でも、現在住んでいる都市の住民になりきたと感ずる者の割合が有意に高くなっている。また、有意ではないが、親しい友人としては現在の居住地の友人だとしている者が、他の2類型よりも多いようである。

それに対して、Ⅰ群の出身地志向型においては、借家・アパート等に住んでいる者の方が多く、職業的にも不安定な者が多いようである。意識の上でも、都会人になれていないと感じている者が多く、有意差はないが、友人として出身地の人間を挙げる者がいくぶん多くなっている。

Ⅲ群の都市生活肯定型は、すでに他の側面でもそうであったように、上記2群のちょうど中間に位置づけられ、どちらの群に対しても、ほとんど有意差を生じていないのである。唯一に職業の点で、Ⅱ群に近いパターンを示し、Ⅰ群よりもいくぶん安定した職業に就いていると思われる。

#### C—2—7 要約と考察

本項C—2では、離村者の将来への見通しから、帰村を希望している「出身地志向型」(Ⅰ群)、都市に積極的にとどまろうとしている「都市生活志向型」(Ⅱ群)、都市生活を現状として認めている「都市生活肯定型」(Ⅲ群)の3群を抽出し、出身地域をこみにしてその3類型間の比較検討を行なった。

Ⅰ群とⅡ群との間に、種々の異なった傾向がみられ、Ⅲ群はその2群の中間に位置することが示された。

まずⅠ群は、関連項目で出身地への志向性の強さが確かめられ、都会と比較して出身地のよさを認めることが多く、現在の住居が持家ではないこともあろうが、特に住居の面で出身地をよしとする者が多くなっている。また、ふるさと意識という面では、やや不安定な態度が認められている。離村時には、都会へ出ることの不安を感じつつ、何とかなるという気持で出てきている。そして現在、職業や住居にもみられるように、必ずしも安定した状態にはない。

Ⅱ群は、それに対して、出身地とのつながりを断ち、出身地の将来を悲観的なものとみなし、積極的に都市での生活を維持発展させようとする構えがみられる。当然、種々の生活様式や生活環境の比較においても、都市のものを肯定する反応が多くなっている。それを裏づけ

るように、職業の面でも安定したものが多く、自分の持家に住んでいる者も、他の2群に比して高くなっているのである。現在の生活に積極的に打ち込んでいる姿をみることができる。

以上の結果に関して、最も重要な課題は、離村し、都市で生活している者の中にみられた「出身地志向」の者を、いわゆる過疎という現象との関連においてどのように位置づけるか、ということであろう。表49にもみられるように、帰村する必然性があるかどうかという点については、長男かどうかでまずみたのであるが、有意差は得られていない。生家の財産の面でも3群間に有意差は得られず、出身地を結びつける客観的指標には特に差がないといってよいであろう。

出身地志向群が他の2群と区別されるのは、すでにみたように、都会へ出ることによる不安を感じながらも、何とかなるだろうという安易な気持で出てきており、他の2群と変わらない期間頑張っているが、何らかの事情で未だに安定した職業に就けず、満足できるような住居にも住めていない、といったことである。そして、この事実から、Ⅰ群の中に、現実逃避的な意味での郷愁が、かなり強く生じてきているのではないかと思えるのである。

そして、表47に関して述べたように、全体として出身地志向群が、出身地の良さを認めながらも、「教育」「医療」「収入」といった生活の最も基礎をなす部分については、他の群と同様、都市の有利さを異論なく認めているのである。すなわち、現在都市で生活しているほとんどの人は、基本的に都市生活の利便に浴しているものであり、出身地志向群といえども、現実に出身地へ回帰していく動きが起こるためには、もっと強い心理的な契機を必要とするように思えるのである。現在のところ、そうした決意をうながすのに必要な条件は、未だ整えられていないと判断せざるを得ない。

明確に出身地志向的である群においてすら、上記のような状態であるので、他の2群においても、また直接は分析の対象とならなかった他の事例についても、現在の状況の中で、それ以上の積極的な動きを予想することは非常に困難である。(松田 惲)

#### D. 都市生活への適応

##### D—1 都市へのとけこみ感について

###### D—1—1 とけこみ感の一般の特徴

現在の都会生活における適応状況を総括的に把握するために(1)職場や学校にとけこんだ感じの程度、(2)この市の住民になり切れた感じの程度の2つの指標を用いた。表50は職場や学校にとけこんだ感じの程度を地域別に示

表50 地域別職場・学校へのとけこみ感

	上 村	坂内村	頓原町	高森町	京極町等	戸沢村等
と け こ ん だ	30 (85.7)	28 (75.7)	31 (88.5)	37 (92.5)	23 (59.0)	32 (78.0)
半分程度とけこんだ	1 (2.9)	1 (2.7)	0	0	3 (7.7)	3 (7.3)
し っ くり し な い	1 (2.9)	2 (5.4)	2 (5.7)	0	9 (23.1)	5 (13.2)
そ の 他	3 (8.6)	6 (16.2)	2 (5.7)	3 (7.5)	4 (10.3)	1 (2.4)

表51 地域別都会人化

	上 村	坂内村	頓原町	高森町	京極町等	戸沢村等
都 会 人 に な れ た	8 (25.0)	17 (45.9)	17 (42.5)	18 (45.0)	7 (17.9)	9 (22.0)
半分程度都会人になれた	6 (18.7)	7 (18.9)	5 (12.5)	6 (15.0)	4 (10.3)	3 (7.3)
田 舎 者 だ	5 (15.6)	3 (8.1)	2 (5.0)	4 (10.0)	14 (35.9)	2 (4.9)
そ の 他	13 (40.6)	10 (27.0)	16 (40.0)	12 (30.0)	14 (35.9)	27 (65.9)

表52 都会人化と職場・学校へのとけこみ感

	都会人になれた	半 分 程 度 都会人になれた	田 舎 者 だ	そ の 他
と け こ ん だ	65 (86.7)	27 (87.1)	22 (73.3)	62 (71.3)
半分程度とけこんだ	1 (1.3)	2 (6.5)	1 (3.3)	4 (4.6)
し っ くり し な い	3 (4.0)	2 (6.5)	4 (13.3)	9 (10.3)
そ の 他	6 (8.0)	0	3 (10.0)	12 (13.8)

したものである。その他のカテゴリーは、職場や学校へのとけこみを考えたこともないし感じたことない、あるいは全然問題にしていない者の数を示している。上村、坂内村、頓原町、高森町の4地域では大部分の者がとけこんでおり、その傾向に差はみられない。それに比較して京極町等・戸沢村等の地域ではしっくりしない者の多さが他地域に比較して目立っている。特に京極町等が他の5地域と比較して多い。

表51は「この市の住民になり切れた感じ」から「都会人化」の程度を地域別に示したものである。その他のカテゴリーはこの市の住民になることを考えたことがない者、あるいはなろうとは思わない者を示している。すべての地域において、都会人になれたと思っている者は過半数に達していない。約半数の者が都会人になれたと思っている地域が坂内村、頓原町、高森町であり、この3地域は同一傾向を示している。一方、戸沢村等はその他のカテゴリーが多く、都会人化を拒否あるいは考えたこともない者が多く、他地域と異なっている。また京極町等も都会人化を拒否している者と都会人化していない者の多さが目立っている。戸沢村等と京極町等の中間的位置に上村がある。このように職場・学校へのとけこみのよさを示している、上村・坂内村・頓原町・高森町の4

地域において、上村のみが都会人化の傾向が異なり、都会人化されていない者、都会人化することを拒否している者の多さが目立ち、さらにはこの傾向は、戸沢村等において顕著である。京極町等のみが職場・学校へのとけこみと都会人化の傾向とほぼ類似したものを示している。この都会人化と職場・学校へのとけこみの関係を示したものが表52である。都会人化による職場・学校へのとけこみに差はみられない。したがって都会人化することが必ずしも職場・学校における適応とは関連はなく、むしろ過疎地域から離村してきた人々にとって、都会人化への拒否を示す者の多い地域が存在するように、別な次元での意識に関与しているものと思われる。

#### D-1-2 出身地との現在の関係

##### (1) 都市へのとけこみ感と出身地への訪問の有無

「都会人になった」と答えた人と、「まだ都会人にならない」、あるいは、「都会人になろうと思わない」と答えた人についても、ほとんどが、「出身地に帰る」と答えており、都会にとけこむことと出身地を捨てることは、同じことではないことを示している(表53)。つまり都会に出た人は、大半がムラを捨てたのではなく、ムラを出ただけということができよう。ムラを出たのであれば、ムラに、年2回(盆と正月)帰ることに対しても

何の抵抗も生ぜず、沢山の土産を持って、隣近所・親類縁者のところへ挨拶まわりに行くことができよう。これは、都会に出た人が、ムラに住む人に対して優越感を持っていることを示しているのではないだろうか。

(2) 都市へのとけこみ感と交友関係

交友関係についてみると表54のようになる。「都会人になった」と答えた人は、予想どおり都市に親しい人が多く、逆に「都会に住んでいても都会人になれない」と感じている人は、出身地の人に親しきを感じている。しかし、「大体都会人になれたと思うが時にはまだまだだと思わされる」と答えた人についてみると、出身地の友

人に親しきを感じている人と、都市の人に親しきを感じている人が、14名対15名ではほぼ同数であり、完全に都会人にもなりきれない心理的側面が、交友関係にまで及んでいるのではないだろうか。都会へ出て来た人は、やはり出身地を捨てたのではなく、出身地というつながりで連帯感を持って生活しているものと解釈できよう。

(3) 都市へのとけこみ感と出身地居住者への態度

表53より、都会に出た人は、ムラに住んでいる人に対して、わずかではあるがなんらかの優越感を持っているようであると述べたが、表55においては、ほとんどが、「村を守ってほしいと思う」か、「生まれたところに生

表53 とけこみ感と出身地への訪問の有無<sup>†</sup>

		〔18〕 あなたは時々出身地へ帰りますか	
		イ	エ
〔16〕 切 これ の 市 感 の 住 民 で す に か り	A この市の住民として立派な都会人になれたと思う	2	28
	B 大体、都会人になれたと思うが、時にはまだまだだと思わされる	0	36
	C 半分程度だろう	1	27
	D わからない	0	15
	E 考えたことがない	2	22
	F 都会人になろうとは思わない	1	23
	G 都会人的なところも身につけたが、大部分はまだまだ	0	11
	H 全然、まだ田舎者だ	0	12
計		6	174

† 無応答・その他は省略、以下表58までは同様。

表54 とけこみ感と交友関係

		〔25〕 出身地での友人とこの市での友人とどちらが親しいですか					
		この市での友人は少ない	出身地の友人との方が親しい	両方同じくらい	比較できない	この市での友人との方が親しい	出身地の友人とは会っていない
〔16〕 切 これ の 市 感 の 住 民 で す に か り	A この市の住民として立派な都会人になれたと思う	1	5	8	2	14	0
	B 大体、都会人になれたと思うが、時にはまだまだだと思わされる	1	14	3	3	15	0
	C 半分程度だろう	3	12	4	2	4	2
	D わからない	1	4	1	2	8	1
	E 考えたことがない	1	7	6	2	8	0
	F 都会人になろうとは思わない	1	13	1	1	8	1
	G 都会人的なところも身につけたが、大部分はまだまだ	0	5	3	1	3	1
	H 全然、まだ田舎者だ	3	6	2	0	2	0
計		11	66	28	13	59	5

表55 とけこみ感と出身地居住者への態度

		〔32〕 出身地に暮らしている人々をどう思われますか					
		可哀想だと思 う	事情があつての 仕方がない	生まれながらの 生活でいいと思 う	村を守つてほ しいと思 う	残るべき人が 残っているの だから当然だ	考えたこと がない 何とも思わ ない
〔16〕 切 これの た市の 感の住 じ民 すに か なり	A この市の住民として立派な都会人になれたと思う	0	4	7	10	1	1
	B 大体、都会人になれたと思うが時にはまだまだだと思わされる	5	3	6	13	4	3
	C 半分程度だろう	0	1	5	13	3	3
	D わからない	2	2	2	4	1	1
	E 考えたことがない	2	4	3	4	4	3
	F 都会人になろうとは思わない	1	3	5	6	2	2
	G 都会人的なところも身につけたが、大部分はまだまだだ	0	3	2	5	1	0
	H 全然、まだ田舎者だ	0	0	2	4	1	0
計		10	20	32	59	17	13

表56 とけこみ感と暮らしの安易さ

		〔32-6〕 暮らしの安易さについて		
		出身地の方が がいい	都会の方が いい	わからない
〔16〕 切 これの た市の 感の住 じ民 すに か なり	A この市の住民として立派な都会人になれたと思う	6	21	3
	B 大体都会人になれたと思うが、時にはまだまだだと思わされる	19	16	2
	C 半分程度だろう	11	12	4
	D わからない	2	9	4
	E 考えたことがない	12	10	4
	F 都会人になろうとは思わない	9	13	1
	G 都会人的なところも身につけたが、大部分はまだまだだ	4	8	2
	H 全然、まだ田舎者だ	6	7	1
計		69	96	25

活しているの、幸せだと思う」と答えており、ムラに対する優越感は見られない（このように応答すること自体が優越感かもしれない）が、大体都会人になれたと思うと答えた人のうち5名が、出身地に住んでいる人を可哀想だと思うと答えている。これは、都会での生活の質に関係がなく、都会は出身地よりも、明らかによいと感じていることのあらわれであろう。しかし、完全に都会人になったと答えた人には、可哀想だと思う応答がみられなかったことをも考え合わせると、単純に優越感とすることには、大きな危険がありそうである。

(4) 都市へのとけこみ感と暮らしの安易さの判断

「暮らしの安易さ」との関連をみた表56の結果が示すように、都会人になれたと感じている人で、暮らしの安易さについては都会の方がよいとする人と、出身地の方がよいとする人はそれぞれ21名と6名である。前者には都会生活の心理的負担はなく、後者についてもそれをきほど問題にする必要はないであろう。また、大体都会人になれたと思っている人が、出身地をよいとすることにも問題はないであろう。しかし、都会人になろうと思わない人で、暮らしの安易さにおいては都会がよいと答える人が13

名おり、この人たちは、都会を生活の場とは受けとめていないのではないかと思われる。それにもかかわらず生活できる点が、大いに問題視されねばならない。

D-1-3 将来の生活の場について

「万一、今の生活がゆきづまったときどうするか〔31〕」については、ほとんどの人が、「都会で頑張る」と答えている(表57)。そして、「あなたは、この市で一生を終るつもりか〔25〕」についても同様に、大半の人が、「一生終るつもりである」と答えている(表58)。これ

は、都会は、出身地よりも、将来の生活が行きづまる可能性が少ないと受け止められていることのあらわれではないだろうか。しかし、「都会人になろうと思わない」、あるいは、「まだ都会人にはならない」と応答した人の中には、「一生終るつもり」と答えた人と、「帰りたい」と答えた人の両方がある。都会人になるつもりはなくて、一生都会で終えるつもりの人にとっては都会の生活はどんなものであろうか。

これらの結果からすると、都会に出た人の大部分は、

表57 とけこみ感と万一のときの生活の場

	〔31〕 万一、今の生活がゆきづまったときどうされますか	〔31〕 万一、今の生活がゆきづまったときどうされますか		
		出身地に引揚げる	何とか都会で頑張る	その時になってみなければわからない
〔16〕 切これた市感の住民ですにかなり	A この市の住民として立派な都会人になれたと思う	2	23	5
	B 大体、都会人になれたと思うが、時にはまだまだだと思わされる	5	27	5
	C 半分程度だろう	2	20	6
	D わからない	2	8	3
	E 考えたことがない	5	12	9
	F 都会人になろうとは思わない	6	13	5
	G 都会人的なところも身につけたが、大部分はまだまだだ	2	8	5
	H 全然、まだ田舎者だ	1	7	5
	計	25	128	43

(注) 無応答とその他は省略

表58 とけこみ感と将来の生活の場

	〔25〕 この市で一生を終るつもりですか	〔25〕 この市で一生を終るつもりですか							
		その考えである	希望はしていないが、そうなると思う	そのうち、生家に呼び戻されるだろう	年をとったら村へ帰りたと思う	今の職をかわるかもしれないので、わからない	他の土地へ移るつもりでいる	転任があるのかわからない	考えたことがない
〔16〕 切これた市感の住民ですにかなり	A この市の住民として立派な都会人になれたと思う	25	1	0	2	0	1	0	1
	B 大体、都会人になれたと思うが時にはまだまだだと思わされる	18	4	0	2	5	3	1	3
	C 半分程度だろう	13	2	1	0	1	1	2	2
	D わからない	8	1	0	2	1	1	1	1
	E 考えたことがない	8	3	0	4	2	2	2	2
	F 都会人になろうとは思わない	11	0	0	4	0	1	1	0
	G 都会人的なところも身につけたが、大部分はまだまだだ	5	3	0	3	1	0	0	1
	H 全然、まだ田舎者だ	6	1	0	2	0	2	0	1
	計	94	15	1	19	10	11	7	11



出身地を全く捨て切ってはならず、それぞれの次元で、出身地を考慮に入れて行動しているのではないであろうか。全く過去の生活を捨て切るとは人間にとって不可能なことであろう。 <蔭山英順・鈴木真雄>

#### D-2 離村者の生活信条

##### D-2-1 分析のねらい

過疎地域から未知の都会へ出てくることはなんといっても大きな不安であり、緊張を伴うものであろうと推測される。単身離村者の場合は、未だ責任は軽く、しかも多くは年令的に若いので、不安・緊張も、それほどはないかもしれないが、一家の責任者として挙家離村にふみ切った人びとの不安・緊張は大きなものと思われる。この不安・緊張状態を生きぬいていくためには、意識の程度はさまざまであろうが、何らかの“生活信条”とでもいったものを持ち、それを支えとして日々の生活をおくっていると考えられる。ここでは以上のような側面に焦点をあてて「あなたにとって、いま一番大切なものは何だと思っていますか 40」】という項目を検討してみたい。

##### D-2-2 資料整理の仕方

項目〔40〕は自由記述方式であるので、面接担当者によって記入の仕方はまちまちである。ただ「健康」とだけ記入されているものもあれば、「自分の健康だけが頼りである」といったように、「健康」という言葉の背後にあるニュアンスが多少でも記入されているものもある。これらを分類するためには、かなり細分化されたカテゴリーが必要となってくるが、もともと少ない資料であるので、ここでは比較的大づかみな分類カテゴリーを作成することにした。分類カテゴリーは、研究グループメンバーの検討の結果次のように決められた。

000 「なし、わからない、考えたことなし」

010 「家庭」-1. 家庭の円満な生活  
-2. 自分の現在の生活  
-3. 家族と一緒に暮らすこと  
-4. その他

020 「家族」-1. 親  
-2. 子ども（跡とり問題を含む）  
-3. その他

030 「子どものこと」  
-1. 教育  
-2. 将来  
-3. 結婚

040 「健康、命、身体」  
-1. 家族の健康  
-2. 自分の健康

-3. 親・兄弟が健康で暮らすこと

050 「家を持つこと」

-1. 土地を守ること

060 「安定した収入」

-1. 金  
-2. 貯金すること  
-3. その他

070 「生活」

-1. 生活の安定  
-2. 豊かな生活（よりよい生活）  
-3. 恥ずかしくない生活  
-4. その他

080 「仕事（職業、職場を含む）」

-1. 一生けん命働くこと  
-2. 今の仕事を続けること  
-3. 事業の開始・拡大  
-4. 資格、技術を身につける

090 「生き方」

-1. 人間回復  
-2. 誠意  
-3. 勉強  
-4. 対人関係、友人、近所  
-5. 信仰・人を信ずること  
-6. 人に尽すこと  
-7. 趣味  
-8. 毎日の生活を大切にする  
-9. 時間  
-0. その他

100 「公害問題」

-1. 空気

110 「自分の結婚」

-1. 彼  
-2. 彼女

##### D-2-3 結果

(1) 出身地別の集計結果は表59のようである。6地域の総計についてみれば、「健康」25.5%、「生き方」20.4%、「仕事」11.9%の順になっている。

各地域別では、上村では「健康」「家族」が同率の19.4%、「生き方」16.7%、「仕事」「家庭」それぞれ11.1%の順であり、坂内村では「健康」28.9%、ついで「家族」13.2%、「なし・わからない・考えたことなし」10.5%の順である。頓原町では「健康」32.5%、「仕事」20.0%、あと「家族」15.0%、「家庭」10.0%の順である。高森町では「健康」30.0%、あと「子どものこと」17.5%、「生き方」15.0%、「家族」10.0%の

表59 地域別の特徴

大分類		地 域					
		上 村	坂内村	頓原町	高森町	京極町等	戸沢村等
なし, わからない, 考えたことなし 家 家 子 健 家 安 生 仕 生 公 自 庭 族 と 体 と 入 活 事 方 題 婚 こ の こ と を 持 つ た 収 入 事 務 問 題 の 結 核	なし		4 (10.5)	2 (5.0)	2 (5.0)	2 (5.0)	
	庭	4 (11.1)	5 (13.2)	4 (10.0)	3 (7.5)	3 (7.5)	
	族	7 (19.4)	3 (7.9)	6 (15.0)	4 (10.0)	1 (2.5)	3 (7.3)
	と	3 (8.3)	3 (7.9)	1 (2.5)	7 (17.5)	8 (20.0)	
	体	7 (19.4)	11 (28.9)	13 (32.5)	12 (30.0)	14 (35.0)	3 (7.3)
	と	3 (8.3)	1 (2.6)	1 (2.5)			
	入	1 (2.8)	2 (5.3)	3 (7.5)	1 (2.5)	2 (5.0)	1 (2.4)
	活	1 (2.8)	2 (5.3)			2 (5.0)	
	事	4 (11.1)	3 (7.9)	8 (20.0)	3 (7.5)	4 (10.0)	6 (14.6)
	方	6 (16.7)	3 (7.9)	1 (2.5)	6 (15.0)	4 (10.0)	28 (68.3)
題		1 (2.6)		1 (2.5)			
の			1 (2.5)	1 (2.5)			
結							
核							
計		36(100.0)	38(100.0)	40(100.0)	40(100.0)	40(100.0)	41(100.0)

順になっている。京極町等では「健康」35.0%が目立ち、「子どものこと」20.0%、あと「仕事」「生き方」それぞれ10.0%の順である。戸沢村等では、「生き方」68.3%がきわ立っており、あと「仕事」14.6%が続いている。

戸沢村等を除いては、各地域とも「健康」がトップで、あと順序は異なっている。「生き方」「仕事」「子どものこと」「家族」が挙げられている。それに比べて、戸沢村等は異質的である。この点は各地域の被調査者の年齢を考慮する必要がある。すなわち、平均年齢をみると、上村33.2才、坂内村40.2才、頓原町31.1才、高森町44.3才、京極町等52.4才となっているが、これらに比べ戸沢村等は平均年齢17.1才と極端に若い層である。当然のことながら、1ケースを除いて、あと40ケー

スは単身離村である。この点では京極町等は戸沢村等と対照的である。すなわち京極町等は6地域のうちで最も高年齢であり、また2ケースを除いたあと38ケースが挙家離村である。そこで京極町等、戸沢村等の2地域をもう一度みてみると、京極町等では「健康」「子どものこと」で55%を占めているのに対し、戸沢村等では「生き方」だけで68.3%を占めている。同じ過疎地域からの離村であっても、高年齢で、しかも家族をその肩に背負った京極町等の場合は、自分の健康、家族の健康といった、“とにかく丈夫で……”ということが意識の中心を占め、「生き方」云々まで、とても及ばないということであろうか。それに反し、若くて、しかも単身離村といった比較的身軽な戸沢村等では、強く「生き方」に意識が向けられている。

表60 離村形態別・都会在任期間別の特徴（大分類）

分類カテゴリー	離村形態		単 身 離 村				挙 家 離 村			
	都会在任期間		1～2年	3～10年	11年以上	計	1～2年	3～10年	11年以上	計
	1～2年	3～10年								
なし, わからない, 考えたことなし	1 (2.5)	1 (2.0)	3 (4.9)	5 (3.3)	1 (2.6)	2 (9.5)	2 (14.3)	5 (6.8)	5 (6.8)	
庭		3 (6.1)	7 (11.5)	10 (6.7)	2 (5.1)	2 (9.5)	1 (7.1)	5 (6.8)	5 (6.8)	
家	3 (7.5)	10 (20.4)	5 (8.2)	18 (12.0)	2 (5.1)	2 (9.5)	1 (7.1)	5 (6.8)	5 (6.8)	
家	1 (2.5)		9 (14.8)	10 (6.7)	7 (17.9)	4 (19.0)	2 (14.3)	13 (17.6)	13 (17.6)	
子	3 (7.5)	12 (24.5)	19 (31.1)	34 (22.7)	14 (35.9)	9 (42.9)	3 (21.4)	26 (35.1)	26 (35.1)	
健		1 (2.0)	1 (1.6)	2 (1.3)	1 (2.6)	1 (4.8)	1 (7.1)	3 (4.1)	3 (4.1)	
家	1 (2.5)	2 (4.1)	5 (8.2)	8 (5.3)	1 (2.6)			1 (1.4)	1 (1.4)	
安			3 (4.9)	3 (2.1)	2 (5.1)			2 (2.7)	2 (2.7)	
生	7 (17.5)	7 (14.3)	2 (3.3)	16 (10.7)	6 (15.4)		1 (7.1)	7 (9.5)	7 (9.5)	
生	24 (60.0)	10 (20.4)	7 (11.5)	41 (27.3)	3 (7.7)	1 (4.8)	3 (21.4)	7 (9.5)	7 (9.5)	
公		1 (2.0)		1 (0.7)						
自		2 (4.1)		2 (1.3)						
計	40	49	61	150	39	21	14	74	74	
	(100.0)	(100.0)	(100.0)	(100.0)	(100.0)	(100.0)	(100.0)	(100.0)	(100.0)	

表61 離村形態別・都會在在期間別の特徴（小分類）

分類カテゴリー(小分類)	離村形態			都會在在期間		
	單身離村			挙家離村		
	1~2年	3~10年	11年以上	1~2年	3~10年	11年以上
「なし・わからない・考えたことなし」	<1>(2.5) <sup>††</sup>	<1>(2.0)	3 (4.9)	1 (2.6)	2 (9.5)	2 (14.3)
「家庭」 <sup>†</sup>		1 (2.0)	2 (3.3)	2 (5.1)	1 (4.8)	
家庭の円満な生活			1 (1.6)		1 (4.8)	<1>(7.1)
自分の現在の生活			1 (1.6)			
家族と一緒に暮らすこと		2 (4.1)				
その他			3 (4.9)			
「家族」	<1>(2.5)	1<2>(6.1)	2 (3.3)			
親	1<1>(5.0)	3<2>(10.2)				
子ども(跡とり問題を含む)		1 (2.0)	3 (4.9)	2 (5.1)	2 (9.5)	1 (7.1)
その他		<1>(2.0)				
「子どものこと」	<1>(2.5)		2 (3.3)	2<2>(10.3)		1 (7.1)
教育			7 (11.5)	2<1>(7.7)	2 (9.5)	<1>(7.1)
将来					2 (9.5)	
「健康、命、身体」	<2>(5.0)	8<2>(20.4)	14 (23.0)	10<2>(30.8)	5<2>(33.3)	2<1>(21.4)
家族の健康			2<1>(4.9)	1 (2.6)		
自分の健康	<1>(2.5)	2 (4.1)	1 (1.6)	<1>(2.6)	1<1>(9.5)	
親・兄弟が健康で暮らせること			1 (1.6)			
「家を持つこと」		1 (2.0)	1 (1.6)	1 (2.6)	1 (4.8)	
土地を守ること						1 (7.1)
「安定した収入」		1 (2.0)	1 (1.6)			
金		1 (2.0)	3 (4.9)			
貯金すること			1 (1.6)			
その他	<1>(2.5)			1 (2.6)		
「生活」						
生活の安定			1 (1.6)	1 (2.6)		
豊かな生活(よりよい生活)			1 (1.6)	1 (2.6)		
その他			1 (1.6)			
「仕事(職業、職場を含む)」	2 (5.0)	3<2>(10.2)	1 (1.6)	6 (15.4)		
一生けん命働くこと						
今の仕事を続けること						1 (7.1)
事業の開始・拡大			1 (1.6)			
資格、技術を身につける	<5>(12.5)	1<1>(4.1)				
「生き方」	3<1>(10.0)	1 (2.0)	1<1>(3.3)	2 (5.1)		2 (14.3)
人間回復			1 (1.6)			
誠意			1 (1.6)			
勉強	8<5>(32.5)	2<2>(8.2)				
対人関係、友人、近所	5<1>(15.0)	1<2>(6.1)	1 (1.6)		1 (4.8)	
信仰、人を信ずること	1 (2.5)	<1>(2.0)		1 (2.6)		1 (7.1)
人に尽すこと		1 (2.0)				
毎日の生活を大切に			1 (1.6)			
時間を大切に			1 (1.6)			
「公害問題」						
空気		1 (2.0)				
「自分の結婚」		<1>(2.0)				
彼		<1>(2.0)				
計 (%)	20<20>(100.0)	31<18>(100.0)	59<2>(100.0)	33<6>(100.0)	18<3>(100.0)	11<3>(100.0)

† 分類カテゴリーは同時に小分類カテゴリーを兼ねている。

†† < >内は女子の頻数をあらわす。%は男女あわせたものについて計算してある。

(2) 離村形態別(単身離村, 挙家離村), 都会在住期間別の特徴

京極町等, 戸沢村等にみられるような差異をさらにはっきりさせるため, 全資料を単身離村か挙家離村かで分類し, あわせて, 都会に出てきてからの年限の違いによって, どのように意識の変化が生ずるかをみるため, 表60, 表61を作成した。なお, 都会在住期間の1~2年, 3~10年, 11年以上の分類は, 特に根拠はなく経験的に一応分類してみたものである。

まず単身離村群では, 全体としては「生き方」27.3%, 「健康」22.7%でほぼ半数をしめ, あと「家族」「仕事」の順である。一方挙家離村群では「健康」が43.7%と一番多く, ついで「子どものこと」17.6%で, あとは10%以下である。

つぎに, 都会に出てきてからの在住期間による変化をみてみよう。まず単身離村群では, 都会生活1~2年の段階では「生き方」が60.0%で圧倒的に多くを占めている。ついで「仕事」が17.5%となっている。この1~2年の群は, ほとんどが独身で年齢も若い。都会生活3~10年の群では, 該当者の半数程度がこの間に結婚し家庭をもっていくが, この群では「健康」24.5%, ついで「家族」と「生き方」が同率の20.4%, 「仕事」が14.3%となっている。都会生活11年以上の群では, ほとんどが結婚し家庭を築いているが, ここでは「健康」が31.1%, 「子どものこと」14.8%, ついで「家庭」「生き方」が同率で11.5%である。

単身離村者の場合, 都会在住期間が長期にわたるに従って, 「健康」に関する項目が増大していくが, その反面, 「生き方」「仕事」に関する項目が減少していくのが特徴的である。また都会に出てきて, やがて結婚し一家を構えるあたり(3~10年)で「家族」について, しかも親についての関心が高まっていることも注目される。おそらく, 村に残っている親のことについて, あれこれ心配しているのであろう。

つぎに挙家離村群について, 都会在住期間別にみてみよう。まず都会に出てきて1~2年の群では, 「健康」35.9%と一番多く, ついで「子どものこと」17.9%, 「生き方」15.4%の順である。3~10年の群では, 「健康」に対する関心が一段と強まり42.9%になる。ついで「子どものこと」19.0%, あとは10%以下である。都会在住期間が11年以上の群では, 頻度が少ないのではっきりしないが, 「健康」「生き方」それに「子どものこと」「なし, わからない, 考えたことなし」あたりが多くなりそうである。挙家離村群の場合は, 単身離村群におけるような, 都会在住期間との一義的関係は認められ

ない。

なお補足的に2~3つけ加えるならば, 単身離村群の場合, 男女差をみても(合計について), 男子では「健康」「生き方」が同率の25.7%, ついで「家族」の10.1%であるが, 女子では「生き方」31.7%, 「仕事」19.5%, あと「家族」17.1%, 「健康」14.6%の順である。

挙家離村群では, 男子は「健康」30.6%, 「子どものこと」14.5%, ついで「仕事」「生き方」が同率の11.3%であるが, 女子では「健康」が58.3%と半数以上を占め, ついで「子どものこと」が33.3%である。男子の場合と同じ順位であるが, 関心の程度は女子の方が強いようである。

小分類項目についてみると, 単身離村群では「家族」の項目の中の「親」に関するものが都会在住期間3~10年の群に多い。「子どものこと」の項目では「教育」が都会在住期間11年以上の群に多い。「仕事」の項目では「資格・技術を身につけたい」というのが都会在住期間1~2年の女子が目立ち, 「生き方」の項目の中では「勉強」が1~2年の群の男子・女子ともに多く, さらに1~2年の男子では「対人関係・友人・近所」の項目が多くなっている。挙家離村群の小分類項目では, とくに目につく特徴は認められない。

D-2-4 まとめ

以上「あなたにとって, いま一番大切なものは何だと思えますか」という質問に対する反応を手がかりに, “生活信条”とでもいったものをみてきたが, ひと口に離村者といっても, 離村形態, 都会在住期間, 性別によって, その“生活信条”は多種多様である。すなわち, 単身離村群でも比較的身軽な時期には, 自分自身の勉強あるいは対人関係の内滑化で代表される「生き方」に意識が向けられているが, 都会在住期間が長くなるにつれて, 「健康」「家族」に関心が移行していく。都会在住期間が3~10年の群では, まだ「生き方」への関心が残っているが, 11年以上の群では「健康」への関心がさらに増加するが「生き方」への関心は減少していく。これに比べ挙家離村者群では, 都会へ出てきた当初から「健康」に意識が向けられ, 単身離村者群で強調された「生き方」への関心は僅かである。「健康」への関心は都会在住期間が3~10年の群に目立ち, 11年以上の群になると「健康」は減少していくが, 「健康」と同じ程度に再び「生き方」への関心がでてくるようである。

全体の傾向としては以上のようなようであるが, 1人1人の生活信条の中味は実にさまざまなものであろう。しかし, いずれにしても, 過疎地域から都会へ出てきた人たち

にとって、それぞれの生活信条が、都会生活に適應していくプロセスの中で、大きな役割を果しているものと推測される。  
(水山進吾・織田揮準)

#### Ⅳ 結果の要約ならびに今後の展開

われわれは、いわゆる過疎地から離村し、現在、都市およびその周辺で生活している離村者の追跡調査から、離村の事情を検討し、彼らがいわゆる過疎地というふるさととどのようにかかわっているかを問題にした。そこで、まずわれわれは離村者の離村の状況、都市での生活感情および生活認知や郷土とのつながりが、離村者の出身地域によって異なるか否かを検討した。

離村の状況を離村の形態、離村の理由および当市選択の理由からみると、面接した6地域のうち、上村（長野）出身の名古屋地区の者、坂内村（岐阜）出身の名古屋地区の者、頓原町（島根）出身の広島地区の者および高森町（熊本）出身の熊本地区の者は、それぞれ各地区の特殊性を示しているが10代で単身離村の者が多く、「村で生活できなくて」「都市で就職するため」といった点などで、相互に共通な面もみられるように思われる。しかし、京極町等（北海道）出身者は「事情の変化」により「農業に不安」をもち、「子供をたよって」離村しており、また戸沢村等（山形）出身者は「進学先があるから」、「将来村で活躍するため」に離村しているなど、他の4地域の出身者とは異なったさまざまな特徴を示している。これは、京極町等出身の札幌地区の者は、主として挙家離村者であり、戸沢村等出身の山形地区の者は、高校在學生であることによる。

離村者の都市での生活感情を、現在の生活に対する満足度、職場や学校への適応感、当市へのとけこみ感からみると、各地区の離村者は離村先の市民になりきれたかどうかは別として、現在の生活に満足している者が多く、職場生活においても、とけこめた感情をもっているものが多く、共通した特徴を示している。ただ、この生活感情に関しても、戸沢村等出身の山形地区の者は、各地区出身者の応答とは異質な反応が多く、さらに、京極町等出身の札幌地区の者も、若干その傾向がある。つぎに、都市での生活認知を、都会を出身地と比較して「人情」「近隣のつきあい」等15項目についてどう思うか、都会で暮らすことの幸せ、当市で一生を暮すか、村へ帰って生活する可能性、および老後の生活の認知からみた。都会がよいか田舎がよいかといった生活認知では、各地区とも都市がよいというかなり共通した認知がみられている。しかし、当市で一生を暮すか、生活にゆきづまったときどうするか、老後の生活をどうするかといった将

来の展望を含めた生活認知では、他地区の出身者が都会で頑張ろうとする者が多いのに比べ、戸沢村等出身の山形地区の者は将来の展望が漠としており、明確とはいえない。

また、郷土とのつながりを、帰村の頻度、親兄弟の来訪の有無といった行動レベルでみると、各地区の離村者は、郷土とのつながりをもっているといえる。しかし、友人の親しさ、子どもの故郷といった心理的つながりの認知をみると、各地区の離村者は、それぞれ特徴があり、一般的な傾向はつかみがたい。これらの認知レベルでの故郷とのつながりは、他の要因により規定される面が多いのであろう。

つぎに、離村状況に焦点づけて、離村時期からの分析、あるいは離村理由の主体性と自信・不安や動機づけの強さとの関連の分析、離村理由を軸にした他の諸要因との関連の分析などを行なった。全般的に一貫した明確な特徴が見出されなかったが、離村理由のいかんによらず動機づけが高くなっていること、戸沢村等を除いた5地域に関して離村時期と理由との関連で「子どもの教育のため」という応答が多くなり、「次・三男だから」といった理由が減少しつつあること、などがみられている。

つぎに、われわれは、ふるさととのつながりを、離村時における離村者の積極性や消極性が、都市での生活感情および認知、とくに、ふるさと観といかにかかわるか、さらに離村者の郷土および都市志向型が、都市での生活感情および認知といかにかかわるかといった観点から検討した。離村理由にみられる自ら積極的に村を離れて、都会で生活することを志向した積極的離村群と、災害や事情の変化で止むをえず離村した状況変化群を、都市生活の認知、この市で一生を終るか、老後をどう考えるか、子どもの故郷はどこかについて比較すると、前者は、現在の生活に満足し、同時に、将来も都市生活を志向し、ふるさとに対する愛着心は少ないのが特徴的である。これに対して、後者は、村での生活に見切りをつけて離村したため、将来、村へ帰る意志や可能性はなく、都市生活の便利さは認めるものの、ふるさとへの愛着は断ち難く、意識の上では、現在も「ムラ人」であろう。一方、外的制約から離村を余儀なくされた消極的離村群は、両者の中間に位置しよう。

また、離村者の将来への見通しから、帰村を希望する出身地志向群、都市に積極的にとどまろうとしている都市生活志向群、都市生活を現状として認めている都市生活肯定群についてみると、出身地志向群は、都会と比較して出身地のよさを認める者が多く、とくに住居の面でよ

いという者が多い。離村時には都会へ出ることの不安を感じつつ、何とかなるといふ気持ちで出てきている。また、都会で暮すことは、幸せともいえない、田舎の方が幸せという者が多く、必ずしも、安定した状態ではない。都市生活志向群は、出身地とのつながりをたち、出身地の将来を悲観的なものとみなし、積極的に都市での生活を維持発展させようとする構えがみられる。都市での生活認知は、都会をよいと認知する者が多く、都会で暮すことは幸せだとする者が多く、現在の生活に積極的に打ちこんでいる姿をみることができる。都市生活肯定群は、以上二群の中間に位置するものといえる。

さいごに、離村者の都市での適応状況を、職場や市民としての適応感情が都市での生活感情および認知、とくに生活適応といかにかかわるか、また、都市での在住期間が生活信条の変化といかに関連するかといった観点から検討した。前者については、全体に都会人になれた、とけこめた、と感じている者が多いことが示されると同時に、そうした人にとって、やはり出身地のつながりが心理的な意味をもっていることが確かめられた。また、生活信条に関しては、都市での在住期間の短い者および単身者が「生き方」をとりあげているのであるが、それが期間の長期化に伴って「健康」そして再び「生き方」と変化している。この結果、適応のプロセスの中で生活信条が重要な役割を果しているのであろうことを考察した。

さて、以上が結果の大要であるが、ここで今後の展開について若干述べておく。

われわれは、過疎の問題を、人口の流出現象が生起している地域に生活する人びとが、その人口流出という変動によって、かれらの生き方にどのような変化が生じているのかを、家族内関係および家族間関係の問題として解明しようとしてきた。そして、いわゆる過疎地の住民から得た面接資料をもとにして、過疎研究グループの各メンバーは、各自のテーマにそくして検討し報告をした。ここでわれわれが報告した離村者の追跡調査のデータは、いわゆる過疎地の住民の生き方の変化をとらえるにさいして、その把握を一層深めるのに役立つであろう。われわれは、すでに面接した過疎地5地域全般的資料をあらためて検討し、過疎現象の理解を深めることが必要である。

つぎに、われわれは、社会変動の激しい現代において、いわゆる過疎地がどのような変貌をとげていくかに

共通の関心をもっていった。われわれの見聞した過疎地では、自給のための生産生活から現金収入中心の生活、いわゆる消費優位の生活へと変貌し、ある程度の生活水準を維持するために現金を求めざるをえない現金追求の悪循環がみられていた。このため、村の魅力も失われ、若年層の流出がみられるように思われた。こうした過疎地での変化の過程を、今後さらに追跡調査することが必要である。共通の関心をもつメンバーによる追跡研究が要請されるのである。  
(久世敏雄・松田 惺)

### 〈あとがき〉

この研究は、北海道大学教育学部三宅和夫教授、山形県教育研究所三沢清男所員、広島大学教育学部小川一夫教授および熊本大学教育学部鈴木康平助教授との共同研究である。お忙しい中を資料収集にご努力くださった共同研究の諸先生方およびこの研究に心よく応じてくださった被面接者の方々に深く感謝の意を表します。

また、統教授亡きあと、名古屋地区過疎グループの研究活動を支援してくださった教室の先生方、ならびに教室研究補佐員朝日民世嬢に感謝いたします。

### 文 献

- 松田 惺・統 有恒ほか 1972 いわゆる過疎地域の家族関係(6)——子どもに対する役割期待について(その1)：山形県大蔵村沼台と島根県頓原町との比較検討——名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科), 19, 81—94.
- 織田揮準・統 有恒ほか 1972 いわゆる過疎地域の家族関係(8)——農家の後継者について——名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科), 19, 105—113.
- 統 有恒ほか 1970 いわゆる過疎地域の家族関係(1)——序報(その1)——名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科), 17, 47—62.
- 統 有恒ほか 1971 いわゆる過疎地域の家族関係(2)——序報(その2)——名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科), 18, 17—32.
- 植村勝彦・統 有恒ほか 1972 いわゆる過疎地域の家族関係(5)——地域共同体意識の変容(1)：公的共同活動の場合——名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科), 19, 65—79.

過 疎 地 域 調 査

1971年11月

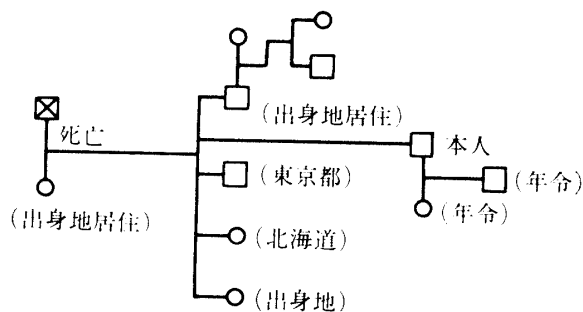
調査のお願い：

私どもは文部省科学研究費により、「過疎地域」に関する総合的調査研究をすすめております。今回は、過疎地域から都会に出てこられた方々を対象に、いろいろご意見を、お聞きがいすることになりました。

個人的に、どなたが、どうお答えになったかということは、最終的な整理の段階では、一切問題にいたしません。したがって、あとあとでご迷惑をおかけするようなことは決してありませんので、どうか、気楽に、ありのままに答えていただきますよう、お願いいたします。

尚、本研究は北海道大学教育学部、山形県教育研究所、名古屋大学教育学部、広島大学教育学部、熊本大学教育学部による共同研究です。

- I (1) ケース番号 \_\_\_\_\_ (2) 面接者氏名 \_\_\_\_\_
- (3) 面接日時 \_\_\_\_\_ 年 \_\_\_\_\_ 月 \_\_\_\_\_ 日 \_\_\_\_\_ 時 \_\_\_\_\_
- (4) 面接場所 \_\_\_\_\_
- (5) 被面接者氏名 \_\_\_\_\_ (6) 同年令 満 \_\_\_\_\_ 才 \_\_\_\_\_
- (7) 最終学歴 \_\_\_\_\_ 大学 \_\_\_\_\_ 学部 \_\_\_\_\_ 学科 \_\_\_\_\_ 中退  
 \_\_\_\_\_ 高校 \_\_\_\_\_ 科 (定時制・全日制) \_\_\_\_\_ 卒業  
 \_\_\_\_\_ 中学校 \_\_\_\_\_ 在学中
- (8) 住所 \_\_\_\_\_ 市 \_\_\_\_\_ 区 \_\_\_\_\_ 町 \_\_\_\_\_ 番地 \_\_\_\_\_ 方 \_\_\_\_\_
- (9) 住居の形態 自分の持家, 借家, アパート, 間借り, 寮・社宅
- (10) 職業 (詳しく) \_\_\_\_\_
- (11) 出身地 \_\_\_\_\_ 県 \_\_\_\_\_ 郡 \_\_\_\_\_ 村 \_\_\_\_\_ 地区 \_\_\_\_\_ 部落 \_\_\_\_\_
- (12) 家族構成 (本人を中心として, 親, 兄弟, 配偶者, 子弟を図示する。それぞれの居住地を記す)



(居住地は県単位で記す)

- (13) 生家の職業 \_\_\_\_\_ (14) 生家の当主の役職 \_\_\_\_\_
- (15) 生家の村内\*での経済的地位: 上, 中, 下 (16) 生家の財産: 山林 町歩, 田畑 町歩  
 [\* 村内とは (村全体, 地区, 部落) か, 確認すること]

いわゆる過疎地域の家族関係 (12)

Ⅰ (1) 「叔父さんや叔母さん、あるいはご兄弟で村を出られた方がおありですか」

ナイ、アル…→叔父、叔母、兄、姉、弟(1)

妹(2)

(\*アル場合には、それぞれに番号を打つ。I-13の例でいけば、上のようになる)

(2) 「それらの方が村を出られたのは、どのようなご事情からですか」

- A 進学のために一時村を出ている
- B 進学し、都会で就職するため (1)
- C 就職のために、しかし、一時的でやがて村へ帰る
- D 就職のために(ずっと都会で働く)
- E 結婚したため (2)
- F とにかく次・三男であるから
- G 災害、職業事情などのため村では暮せなくなったから
- H その他(\*簡単に記す)

(\*離村の事情を大別して、A~Hとし、各人について該当のところに番号を記入する)

Ⅱ (3) 「あなたが村を出られたのは、いつでしたか」

年 月、満 才の時、今から 年前：単身・集団・家族同伴

(4) 「あなたが村を出られたのは、どのようなご事情からですか」(\*二重チェック可)

- A 進学し、村へ帰って活躍するため
- B 進学し、都会で就職するため
- C 一応就職し、働きながら学ぶため
- D 就職し、腕を磨いて、村で活躍するため
- E 都会でずっと働くため
- F 結婚までの間、働きながらその準備をするため
- G 結婚したため
- H 次・三男で、とにかく村にはいられないので
- I 村には居たかったが、村で働く場所がないので
- J 災害に遭って、村では暮しが立たなくなったため
- K 村で働いていたが、事情の変化で、成り立たなくなったため
- L その他(\*詳しく。なお、A~Kについても詳しく聞き、要点を記す)

(5) 「村を出るのを決めるとき、誰かに相談されましたか」

- A 子どもの頃から決っていた
- B 十分に相談した…→誰と? 父,母,兄,姉,先生,親戚,その他
- C 一応相談した…→誰と? 父,母,兄,姉,先生,親戚,その他
- D 相談したが反対された…→誰に? 父,母,兄,姉,先生,親戚,その他
- E 一人で決めた

(\*相談相手のその他としては、友人、妻、子ども、役場、隣組の人などがある)

(6) 「村を出ることを誰かから奨められましたか」

イエ、ハイ→誰から? 父,母,兄,姉,親戚,先生,知人,会社,  
その他



(7) 「村を出てからのことについて、自信はありましたか」(両方にチェックする)

- |   |   |
|---|---|
| <p>A 十分自信があった</p> <p>B あまり自信はなかった</p> <p>C 何も感じなかった</p> <p>D 若干不安であった</p> <p>E 全く不安であった</p> | <p>a 大いに頑張ってやっていたと思った</p> <p>b やれば何とかなると思った</p> <p>c 特別何とも思わなかった</p> <p>d あまり気がすすまなかった</p> <p>e 全く気がすすまなかった</p> |
|---|---|

(8) 「村を出るまでの間に、都会に来たことがありましたか\*」(\*多肢選択も可)

ナイ、アル...→何処へ、何のために、何回ぐらい

- |   |                                  |
|---|----------------------------------|
| <p>A 修学旅行で</p> <p>B 団体旅行で</p> <p>C 親戚をたずねて</p> <p>D 出稼ぎで</p> <p>E その他</p> | <p>都会名 _____</p> <p>回数 _____</p> |
|---|----------------------------------|

(9) 「この市へ出てくることを決めたのはどうしてですか」

- |  |  |
|--|--|
| <p>A 進学先があるから</p> <p>B 就職先の所在地だから</p> <p>C 親戚があるから</p> <p>D 知人がいるから</p> <p>E 村に近いから</p> <p>F その他</p> | <p>a 学校の先生の斡旋で</p> <p>b 縁故者から(誰)の紹介で</p> <p>c 親のすすめで</p> <p>d 就職先からの勧誘で</p> <p>e 自分自身の判断で</p> <p>f その他</p> |
|--|--|

(\*両方チェックし、多肢選択も可)

(10) 「あなたが村を出られることが決まった時、ご家族の考えはどうでしたか」

	父	母	兄弟姉妹	親戚	妻	子ども	祖父母
A とても喜こんだ							
B 嬉しそうだが反面寂しそうだった							
C 別に何とも思わないようだった							
D できたら出ない方がいいようだった							
E それでも反対だった							
F わからない							

(\*該当するところに○印を入れる)

(11) 「あなたが村を出られることが決まった時、ムラ(部落)の人たちはどうでしたか」

	親戚	ムラ人	先生	同級生
A よろこんで励ましてくれた				
B 村に残るように引きとめてくれた				
C 別れを惜んでくれた				
D 当然だという顔をしていた				
E 無反応であった				
F 冷淡であった				
G わからない				

いわゆる過疎地域の家族関係 (12)

- IV (12) 「この市へ出てきて、現在の生活に満足していますか」「その程度を5段階に分ければどの程度ですか」 (\*全く満足5 どちらでもない3 全く不満1)

	満足度	具体的な指摘	ムラとの比較 (5段階評定でも可)
1. 身体の調子のよさ			
2. 毎日の気分のよさ			
3. 日常生活の便宜			
4. 収入			
5. 職場 (学校)			
6. 仕事の内容 (勉学)			

(\* 良し悪しにかかわらず、具体的にはどういうことかを聞き、摘記する)

- (13) 「現在居住している市に、同郷の人はおられますか」  
イナイ、シラナイ、イル…→誰；伯叔父母，同胞，従兄弟，同窓生，知人
- (14) 「その人たちと親しく交際しておられますか」

	伯叔父母	同 胞	従 兄 弟	同 窓 生*	知 人*
A 親しく交際している					
B 普 通					
C 全然交際していない					

(\* 同窓生，知人についてはその人数も記入する)

- (15) 「職場や学校に溶け込めた感じですか」\*
- A 完全に溶け込んで、自分が他所者という感じがしない  
B 大体溶け込めたと思うが、時々しっくりしない感じもする  
C 半分程度だろう  
D うまくいっている面もあるが、しっくりしない感じが強い  
E 全然溶け込めない、水に浮いた油のような感じだ  
F そういうことを考えたこともないし、感じたこともない  
G そういうことは全然問題にしていない

(\* 余白に具体的な点を摘記すること)

- (16) 「この市の住民になり切れた感じですか」\*
- A この市の住民として、立派な都会人になれたと思う  
B 大体、都会人になれたと思うが、時にはまだまだと思わされる  
C 半分程度だろう  
D わからない  
E 考えたことがない  
F 都会人になろうとは思わない  
G 都会人的なところも身につけたが、大部分はまだまだだ  
H 全然、まだ田舎者だ

(\* 余白に、具体的な点を摘記すること)

(17) 「この市へ出てきた当初と現在とを比較して、あなた自身が変わってきたと思う点  
がありますか」

ナイ、アル…→具体的にはどんな点か\*

A \_\_\_\_\_

B \_\_\_\_\_

C \_\_\_\_\_

D \_\_\_\_\_

(\*よく聞いて、当初と現在との比較を摘記すること)

V (18) 「あなたは、時々出身地へ帰りますか」

イエ、ハイ…→年に \_\_\_\_\_ 回、どんな時か? 盆, 暮, 正月, 婚礼, 葬儀  
その他 \_\_\_\_\_ 泊るところは?

単身か, 家族連れでか \_\_\_\_\_

必ず挨拶に行く家は? ナイ、アル…→ どこ?

(19) 「生家へ手紙を出したり、電話をかけたりしますか」

A 手紙 イイエ、ハイ…→ 年に \_\_\_\_\_ 回 \_\_\_\_\_ どの時か?

B 電話 イイエ、ハイ…→ 年に \_\_\_\_\_ 回 \_\_\_\_\_ どの時か?

(20) 「生家から手紙が来たり電話がかかたりしますか」

A 手紙 イイエ、ハイ…→ 年に \_\_\_\_\_ 回 \_\_\_\_\_ どの時か?

B 電話 イイエ、ハイ…→ 年に \_\_\_\_\_ 回 \_\_\_\_\_ どの時か?

(21) 「出身地の(生家以外の)人々へ手紙を出したりしますか」

A 手紙 イイエ、ハイ…→ 年に \_\_\_\_\_ 回 誰へ? 用件 \_\_\_\_\_

B 電話 イイエ、ハイ…→ 年に \_\_\_\_\_ 回 誰へ? 用件 \_\_\_\_\_

(22) 「出身地の人々から手紙が来たりしますか」

A 手紙 イイエ、ハイ…→ 年に \_\_\_\_\_ 回 誰から? 用件 \_\_\_\_\_

B 電話 イイエ、ハイ…→ 年に \_\_\_\_\_ 回 誰から? 用件 \_\_\_\_\_

(23) 「生家から親兄弟が訪ねてくることがありますか」

イエ、ハイ…→ 年に \_\_\_\_\_ 回 誰が \_\_\_\_\_ どの時

(24) 「出身地から知人や親戚が訪ねてくることがありますか」

イエ、ハイ…→ 年に \_\_\_\_\_ 回 誰が \_\_\_\_\_ どの時

(25) 「あなたは、この市で一生を終るつもりですか」

A その考えである

B 希望はしていないが、そうになってしまうと思う(その事情: \_\_\_\_\_)

C そのうち、生家に呼び戻されるだろう(その事情: \_\_\_\_\_)

D 年をとったら村へ帰りたと思う(その事情: \_\_\_\_\_)

E 今の職をかわるかもしれないので、わからない

F 他の土地へ移るつもりでいる

G 転任があるのでわからない

H 考えたことがない

(26) 「何かの生家の事情で、また、村へ帰って生活することがありうると思いませんか」

イエ、ハイ…→ どんな場合か

(27) 「ご両親が年寄られたとき、その面倒をどうやってみられますか」

- A 跡取りが全面的に見るのが当然である
- B 跡取り以外の者も応分の援助をすべきだ
- C 親が厄介になりたい子どものところへ行くのがよい
- D 先ず、自分が親を引きとろうと思う
- E 子どもが相談して決めるべきだ
- F 考えたことがない
- G その他

(28) 「出身地での友人と、この市での友人とどちらが親しいですか」

- A この市での友人はいない
- B 出身地の友人との方が親しい
- C 両方同じくらい
- D 比較できない
- E この市の友人との方が親しい
- F 出身地の友人とは会っていない

VI (29) 「あなたの出身地はどんなところですか」\*

(\* 出身地とは次のどの範囲かをチェック…村, 地区, 部落)

- A 主産物: \_\_\_\_\_
- B 人口: 約 \_\_\_\_\_ 人, 人口の減り方: この \_\_\_\_\_ 年間に \_\_\_\_\_ 人
- C 交通: \_\_\_\_\_ 駅から, バス \_\_\_\_\_ 時間, (1日 \_\_\_\_\_ 便), 徒歩 \_\_\_\_\_ 時間
- D 中学校: 本校, 分校, 同級生 \_\_\_\_\_ 人, 村に残っている人 \_\_\_\_\_ 人
- E テレビ: \_\_\_\_\_ 戸のうち \_\_\_\_\_ 戸ぐらいにある

(30) 「あなたの出身地は、どうなっていくとお思いですか」

- A そのうち、だんだん開けてきて、盛りかえすと思う
- B 大体现状維持でいけるだろう
- C ますます人が減っていくだろう
- D そういうことは考えたことがない
- E その他

(31) 「万一、今の生活がゆきづまったとき、どうされますか」

- A 出身地に引揚げる
- B 何とか都会で頑張る
- C その時になってみなければわからない

(32) 「出身地に暮している人々をどう思われますか」

- A 可哀想だと思う
- B 事情があってのことで仕方がない
- C 生れたところに生活しているので、幸せだと思う
- D 村を守ってほしいと思う
- E 残るべき人が残っているのだから当然だ
- F 考えたことがない、何とも思わない
- G その他

- (33) 「あなたの出身地と都会とを比較して、出身地をどう思われますか」(○印を入れる)

	出身地の方がいい	都会の方がいい	わからない	具体的に
1 人情について				
2 近隣のつき合い				
3 仕事の厳しさ				
4 収入				
5 物の購買				
6 暮しの安易さ				
7 医療				
8 教育				
9 交通				
10 娯楽				
11 住居				
12 結婚				
13 葬儀				
14 習慣				
15 生活環境				

- VI (34) 「跡取りという考え方をどう思われますか」

- A 昔からの伝統だから、当然だと思う  
 B 現在のような世の中には合わないのでやめた方がいい  
 C 財産を分けてしまうと零細化してしまうので、仕方がない  
 D 跡取りになる人の自由が束縛されるので反対だ  
 E 特に考えてみたことがない  
 F その他

- (35) 「結婚の相手は同じ出身地の方がいいと思われますか」\*

- A 同郷の人でなければ困る その理由  
 B 同郷の人でなくても、近村の人ならいい  
 C 出身地がどこであるかなど問題にしない  
 D 同郷とかその近くの人でない方がいい  
 E 同郷の人だけは嫌だ  
 F その他

(\*未婚の場合は本人の意見, 既婚者の場合は子どもの結婚相手について聞くこと)

36) 「あなたの老後をどう考えていますか」

- A 出身地へ帰ってのんびりと暮したい
- B 都会で楽しく暮したい
- C どうなるか、考えたこともない
- D 子どもに面倒をみてもらう (子どもの厄介になる)
- E 養老院・老人ホームへ行く
- F その他

37) 「あなたのお子さんの故郷はどこだと思われませんか」

- A 当然、自分の出身地だ
- B 子どもが生まれ育った所 (この市) だ
- C 自分の子どもには故郷はないと思う
- D 考えたこともない
- E その他

38) 「墓を守ることにどう考えておられますか」

- A 祖先の墓を守ることは必要で、それは主として跡取りの役目だ
- B 祖先の墓を守ることは必要で、子孫が力を合せてやるべきだ
- C 祖先の墓を守ることの意味など考えたことがない
- D 墓を守ることは意味がない
- E その他

39) 「人間にとって都会で暮すことは幸せだと思われませんか」

- A 問題なく幸せだ
- B 田舎で暮すことと比べれば、都会で暮す方がまだ幸せだ
- C 同じくらい・どちらともいえない・わからない・考えたことがない
- D 田舎で暮すことの方がまだ幸せだ
- E 全然幸せではない

40) 「あなたにとって、いま、一番大切なものは何だと思っていますか」

## VII 面接状況

STUDIES ON THE INTER- AND INTRA-FAMILY RELATIONSHIPS IN THE  
SO-CALLED "KASO" (TOO-THINLY-PEOPLED) COMMUNITIES (12)

—THROUGH THE FOLLOW-UP STUDY OF PEOPLE WHO LEFT  
THE SO-CALLED "KASO" COMMUNITIES—

Toshio KUZE, Shingo MIZUYAMA, Sei MATSUDA, Kijun ODA,  
Tadao NAGATA, Hidenori KAGEYAMA, Katsuhiko UEMURA,  
and Masao SUZUKI

The purpose of this study is to find out the reasons of their exodus, the conditions of their adjustment in a city, the relations with their native home, and the like through the follow-up study of people who, leaving the so-called "kaso" (too-thinly-peopled) communities, live in a city at present.

About 240 rural exodusers who moved from 6 villages to cities—from Kyogoku-cho (Hokkaido) to Sapporo City, from Tozawa-mura (Yamagata Prefecture) to Yamagata City, from Kami-mura (Nagano Prefecture) and Sakauchi-mura (Gifu Prefecture) to Nagoya City, from Tonbara-cho (Shimane Prefecture) to Hiroshima City, and from Takamori-cho (Kumamoto Prefecture) to Kumamoto City—were interviewed.

The whole tendencies on the results of this investigation are as follows :

- 1) There are large differences among 6 villagers as to the conditions of rural exodus, the reasons of choice of the very city as a new living area, and the like.
- 2) They are satisfied with their present life concerning such affective aspects of life as the consciousness of adjustment to their post or school, and to the respective city.
- 3) There are also the considerable common responses in all rural exodusers as to such cognitive aspects of life as the comparison on various aspects (e.g. social connection with the neighborhood, income, education, etc.) between city and their native home.
- 4) There are also the commonness in all 6 villagers as to such behavioral aspects of the relations with their native home as the frequency of visiting to their native place, and their parents and brothers' visiting to their house, and the like.
- 5) But, there are the differences of response among 6 villagers, as to such psychological aspects of the relationship with their native home as the familiarity with friends in the village, the cognitions of their children's native home, and the like.

Next, we analyzed the strength of their relation with the native home from such viewpoints as the degrees of spontaneity of their rural exodus, and the place in which they shall desire to live in future (that is, city oriented or native home oriented).

The outlines of these results are as follows :

- 1) People who were actively themselves for the rural exodus and oriented to the living in a city are satisfying with their present life, orient to a living in a city for future, and have few attachment to their native home. On the contrary, though people who were compelled to do rural exodus by the disaster or unavoidable circumstances are satisfying with respect to the facilities of city living, they have a strong attachment to their native home. They are "villagers" in their consciousness still now. The rest of people named "negative rural exodus group", who did rural exodus by external condition (—for example, being the second or the third son—)

have intermediate life attitudes between the first two.

2) People who orient positively to their life in futue consider the future of their native place gloomy, think their life in the city happy, and have a set of maintaining and developing their living in the city. The home oriented group, on the contrary, show opposite attitudes, and their psychological conditions are not always stable. The third group named "the affirmation group of city living" have intermediate attitudes.